

2019年7月1日

みずほディーラーズアイ (2019年7月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 105.00 ~ 109.00

国際為替部 為替営業第二チーム 光石 晋祐

■ 先月の為替相場

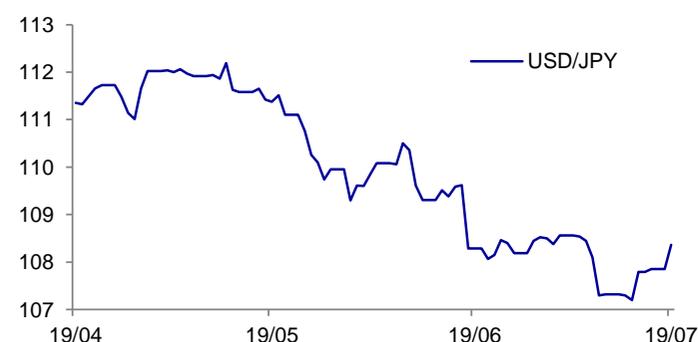
先月のドル円は108.35近辺にてオープン。米5月ISM製造業景況指数が市場予想を下回りドル売りが強まったことに加え、ブロードセントルイス連銀総裁の「インフレ押し上げのため、近く利下げが適切になる可能性がある」との発言に米利下げ観測が強まると、ドル売りが加速し、4日にかけてドル円は107.85まで下落。5日に発表された米5月ADP雇用統計が市場予想を大幅に下回る結果となり、107.81まで急落する局面もあったが、米株式相場が堅調に推移したことやメキシコへの関税賦課が回避されるとの期待感から108円台前半まで推移。7日に発表された米5月雇用統計が市場予想を大幅に下回ると、再度107.88まで下落する展開となったが、週末にトランプ米大統領がメキシコへの関税賦課を無期限で停止すると発表し、リスク回避ムードが和らいだことから、ドル円は週初からギャップオープンし、12日にかけて先月の高値となる108.80まで上昇。その後は香港における中国政府への大規模抗議デモの発生や、米政府がホルムズ海峡でのタンカー襲撃事件をイランの責任と断定したことからリスク回避姿勢が強まり、108円前半まで下落。17日に発表された米6月ニューヨーク連銀製造業景況指数が市場予想を大幅に下回ったことや翌18日に新潟・山形地震が発生すると108円台後半まで戻っていたドル円は再び108円台前半まで下落したが、トランプ大統領の発言により米中通商協議再開への期待感が強まると、再び108円台後半まで上昇。19日に開催された米FOMCは、政策金利は予想通り据置きながら、声明文から「辛抱強く」の文言が削除され、代わりに「適切に行動」との文言が追加されたことで次回以降のFOMCでの利下げが示唆されると、ドル売りが強まり107円台後半まで急落、翌20日にイランが米無人偵察機を撃墜し、米国とイランの対立が激化すると地政学リスクの高まりが意識されたことから、21日にかけて107.05を示現。更にトランプ米大統領がイランに新たな制裁を課すとの報にリスク回避姿勢が強まり、25日にドル円は先月の最安値となる106.78まで下落する展開となった。その後、ブロードセントルイス連銀総裁が「50bpの利下げを実施する状況にはない」と発言したことが伝わると、米大幅利下げ観測が後退し、対主要通貨でドルが買い戻されたことにドル円も連れ高となり、更にムニューシン米財務長官が米中貿易合意は90%完了と発言したとの報や27日に香港紙より米中貿易戦争の休戦が報じられると、リスク回避姿勢の後退から一段とドル円の買い戻しが進み、108.16まで上昇したが、この米中貿易戦争休戦の報が中国当局に否定されたことで再び107円台後半まで下落しクローズしている。

■ 今月の見通し

今月のドル円は対主要通貨でのドル売りが継続することにより、上値が重い展開を予想。
先月の米FOMCでは利下げが示唆されたものの、その声明文や記者会見において市場に利下げの時期や幅について明確な手がかりを与えなかったことにより、今後発表される経済指標やFRB高官の発言内容がより大きな注目を集めることとなる。基本的にはその数字や発言内容に対する解釈が利下げの時期や幅への思惑を生み、ドルが対主要通貨で上下する展開となると見ている。こうした状況下、去年12月までタカ派であったFRBが利下げ路線に転換した心理的インパクトは大きく、ドルに対するセンチメントの悪化が実態以上にドルの上値を抑える可能性が高いことに加え、これまで金融正常化を図ってきた米国は、同様に追加緩和も辞さずとしている欧州や日本等主要国に比べて金融緩和の余地が大きいこともドル売りを助長する要因となるものと考えており、こうしたドル自体の要因によりドル円の上値は限定されるものと考えている。
一方、ドル円の下支え要因として、利下げ期待による株価上昇に伴いクロス円での円売りが活発になることが考えられるが、金融市場には依然米中貿易摩擦や英国の合意無き離脱等解決に時間を要する懸念事項が燃えていることに加え、米国とイランの関係悪化に伴う地政学リスクの高まりという新たな懸念事項が生じる等、リスク回避材料が山積の状況。こうした状況下、欧米株式相場が上昇するとしても逃避通貨の代表格である円を売り込むことは難しいものと考えている。
こうしたドルと円を取り巻く環境を考慮すると、今月のドル円は上値が重い展開となることを予想している。
今月は、先述の通り各種米国の経済指標、特に雇用およびインフレ関連指標、並びにFRB高官発言が注目材料。雇用情勢が堅調であることや予想外のインフレ高進が見られる場合は、FRBによる早期利下げの合理的理由が薄れることで利下げ期待が急速にしぼみ、ドルの買い戻しが活発化する可能性もあり留意が必要。

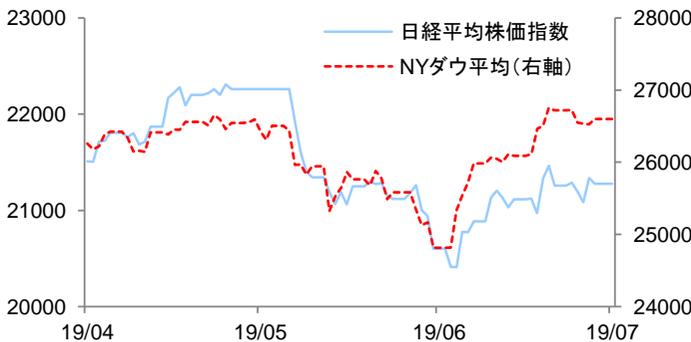
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/3	ISM製造業景況指数	5月	53.0	52.1	52.8
6/5	ADP雇用統計	5月	185k	27k	275k
6/7	非農業部門雇用者数変化	5月	175k	75k	263k
6/7	失業率	5月	3.6%	3.6%	3.6%
6/17	ニューヨーク連銀製造業景況指数	6月	11.0	-8.6	17.8
6/20	フィラデルフィア連銀景況指数	6月	10.4	0.3	16.6
6/21	中古住宅販売件数	5月	5.30m	5.34m	5.19m
6/25	新築住宅販売件数	5月	684k	626k	673k
6/27	GDP	1Q	3.2%	3.1%	3.1%
6/27	コアPCE(前年比)	1Q	1.0%	1.2%	1.0%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル/円 見通しまとめ

ブル	1名	106.00 ～ 109.50	ベア	15名	105.00 ～ 109.00
----	----	-----------------------	----	-----	-----------------------

※ レンジは中心値

田中	ベア	105.00 ～ 109.00	米中貿易問題は長期化がメインシナリオ。またイラン情勢も予断を許さず不安定な外部環境が続く。足元はFEDの利下げを過度に織り込んだ反動に調整が予想されるが、日銀の緩和余地も勘案し反発は限定的で上値重い展開を見込む。
田坂	ベア	105.00 ～ 109.00	米国通商協議や地政学リスクを背景とする米金利低下・ドル売りトレンドが継続。但し、7月FOMCの利下げを完全に織り込むどころか50bp利下げも一部見込まれている現状にはやや行き過ぎ感があり、一時的な反発も予想される。
大庭	ベア	105.50 ～ 109.00	米中貿易摩擦による米景気後退懸念は払拭されず、FRBも年内利下げを示唆していることから、ドル円は上値の重い展開継続。ただ、市場の過度な利下げ織込みを警戒し、FRB高官発言で鎮火する場面では一時的に戻す可能性もある。
高村	ブル	106.00 ～ 109.50	米中通商問題については対話姿勢継続と考えており、大幅に縮小した投機筋の円ショートポジション、過度に織り込まれた米金利市場等の状況を勘案すると、ドル円の上昇余地が相応にありそうだ。
谷舗	ベア	105.00 ～ 109.00	米中協議の長期化懸念に加え、新たにイラン-米国の緊張激化がリスクオフ要因として意識されるなか、地合いの悪さは継続するだろう。Fedの政策転換が明確化したことで日米金利差も縮小しており、ドル円の上昇は見込みにくい。
大谷(未)	ベア	106.00 ～ 109.50	米中貿易摩擦の長期化からグローバルに景気減速懸念が強まっている。米中通商協議が合意に向かえば円安に振れる可能性はあるが、現状FRBによる7月以降の複数回の利下げ観測が強まっている中引き続きドル円は上値重く推移すると予想。

竹内	ベア	105.00 ～ 109.00	米金融政策を見通す中、利下げをどこまで織り込めるかが焦点。また米大統領選挙を視野に入ると、米中問題の大幅進展は望み薄。本邦勢の買いに下値は拾われようが緩やかな円高進行を想定。
加藤	ベア	106.00 ～ 109.00	米通貨・通商政策、景気循環、地政学的リスクに鑑みればドル高は望めない。一方で本邦実需筋からの旺盛な円売りフローは105円手前でドル/円の下落速度にブレーキをかけるものと考えている。
関	ベア	104.00 ～ 109.00	米中協議は追加関税の応酬から非関税措置(取引や投資の規制、事実上の禁輸措置など)を交えた攻防へのシフトを想定し長期化は必至とみる。米中対立による経済成長率の減速と、FEDの利下げも相俟って、金利低下とドル売りを予想する。
光石	ベア	105.00 ～ 109.00	タカ派だったFRBが利下げ路線に方針変更したことは心理的なインパクトが大きくドルの上値を抑える要因となろう。米中貿易戦争やブレグジット、地政学リスクの高まり等リスク回避要因も引き続き多く、ドル円の下落を予想している。
岡本	ベア	105.00 ～ 110.00	米中覇権争いは長期のテーマで不変。目先は7月米利下げの有無を確認したい。前回FOMC時からの追加データは1ヶ月分しかなく、利下げを正当化できるのかに注目。テールリスクは催促相場に比べられなかった場合か。
上野	ベア	105.00 ～ 109.00	米経済は曲がり角に差し掛かっているという認識。米中通商協議の進展(期待)などで一時的に上昇する局面も想定されるが、完全妥結までは遠い認識。米経済の先行きに不透明感が晴れない中で、ドルが上昇基調となる蓋然性は乏しいか。
玉井	ベア	105.50 ～ 109.00	G20での米中首脳会談を受けて貿易協議継続となれば一時的にドル円は上昇する局面はあるだろうが、次回FOMCでの利下げが意識される中、上値の重い展開の継続を予想。
原田	ベア	105.00 ～ 108.90	月初の軟調な雇用統計に象徴されるように、米経済は徐々に下振れ。加えて、米中通商協議の長期化もドルに対する不確実性を高めている。G20での米中会談の結果が進展なしとなれば、引き続きドルベア目線が継続すると予想。
森谷	ベア	106.00 ～ 109.00	7月FOMCでの利下げを織り込む動きは既に進んでいるものの、グローバルな景気減速懸念が拭いきれない中、更なる追加利下げの可能性も引き続き意識されるだろう。ドル売り地合い継続を予想。
大熊	ベア	105.00 ～ 109.00	米中両国は政治的な思惑から通商問題に関してなかなか妥協せず、米中貿易戦争の長期化が懸念される。イラン情勢も予断を許さない中、リスクオフが強まりやすく上値重い展開を予想。ただ、金利先安観から米株は底堅い為、下値は限定的か。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.1150 ~ 1.1450
EUR/JPY 119.00 ~ 124.00

国際為替部 為替営業第二チーム 小笠原 捷

■ 先月の為替相場

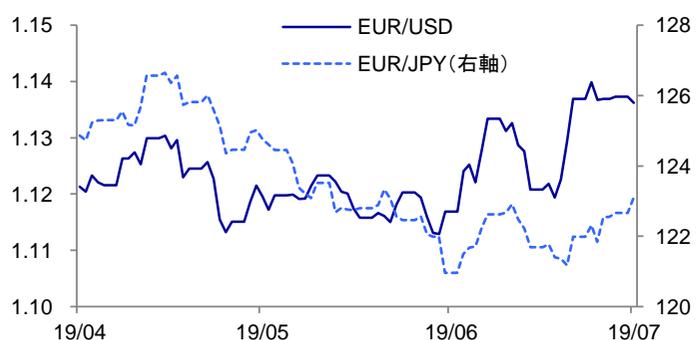
6月のユーロ/ドルは小幅に上昇した。月初3日に1.11台後半でオープンしたユーロ/ドルは一時月安値1.1159をつけたが、ブラード・セントルイス連銀総裁が利下げを示唆する発言をしたことから1.12台後半まで上昇。5日、米5月ADP雇用統計が市場予想を下回る結果となりドル売りが進行し、1.13台まで続伸するも、米国が対メキシコ関税を取り下げの見方が強まったことからドル買いの流れとなり、1.12台前半まで反落。6日、ECB政策理事会で主要政策金利の据え置きが決定されるも、声明文やドラギECB総裁の会見が市場予想ほどハト派的な内容で無かった事からユーロが買われる展開となり、1.13台を回復。7日、米5月雇用統計が弱い結果となったことからドル売り地合いとなり、ユーロ/ドルは1.1348まで続伸。10日と11日は方向感無い展開が続いたが、12日、トランプ米大統領がロシア産ガスを欧州に輸送するパイプライン「ノルドストリーム2」への制裁を検討していることが明らかとなると、米国と同プロジェクトを支持しているドイツとの関係悪化が懸念されたことでユーロ/ドルは1.12台後半まで反落した。14日、米5月小売売上高が良好な結果となったことからドル買いが進行し、ユーロ/ドルは1.1203まで続落。17日、米6月ニューヨーク連銀製造業景気指数が予想を大幅に下回ったことでドルが売られるとユーロ/ドルは1.12台半ばまで強含むも、その後はじり安の展開。18日、ドラギECB総裁が「追加緩和は依然として政策ツールの一部」と発言したことや独6月ZEW景況感指数が悪化したことからユーロ/ドルは1.1181まで下落。19日、FOMCがハト派の内容となったことでドル全面安の中、ユーロ/ドルは20日にかけて1.13台まで上昇。21日、欧州時間に発表されたフランスとドイツの6月製造業PMIが市場予想を上回ったことから1.1350付近の200日移動平均線を上抜けると、1.1378まで続伸。その後もユーロ/ドルは上昇基調となり、25日には月最高値1.1412まで買われた。26日、特段材料が無い中で前日安値(1.1344)が短期的なサポートとして認識される中、週末のG20サミットを前にイベント待ちの展開となり、28日にかけて1.13台後半で動意薄く推移した。

■ 今月の見通し

今月のユーロは上値重く推移する展開を予想する。マーケットは米国の経済や金融情勢に強く左右されている。米中通商問題に加え、中東における地政学的リスク、各種米経済指標の弱い結果が反映する米景気の後退懸念、FOMCによる利下げ観測の高まり等、米国の情勢が市場のボラティリティを高めている可能性が高い。6月19日のFOMC以降、ドル売りの流れによってユーロ/ドルは大きく上昇したものの、ユーロがドル売りの受け皿となったに過ぎず、欧州圏経済の強さを表したものではないだろう。これまでECBは政策金利の引き上げ時期を探っていたが、ドラギECB総裁が「追加緩和は依然と政策ツールの1つ」と述べたように明確に金融政策の方針を変更した可能性が高いか。また、ECBによる債券購入プログラムを批判していたバイトマン独連銀総裁がECBの金融政策を肯定する発言を行った。タカ派として知られるバイトマン独連銀総裁がハト派な内容を述べたことはECB理事会のほぼ全てのメンバーが欧州景気に対する懸念を高めたことを表わしているだろう。またBrexitに関しては合意なきEU離脱のリスクが払拭されておらず、現地企業や金融機関はHard Brexitに対する備えを再開させているように見受けられる。離脱期限が10月末まで延長されているものの、Hard Brexitを推進してきたジョンソン氏が英首相になる可能性が高い中、英国のEU離脱問題も引き続きユーロの上値を重くしよう。政治面ではトランプ米大統領や安倍首相の支持率が安定している一方で、メルケル独首相やマクロン仏大統領の支持率は非常に低迷しており、政治面でもユーロは売られやすい地合いだと考えられる。またロシア産ガスを欧州に輸送するパイプラインを政策対象に検討しているとの報道もあり、同プロジェクトを支持するドイツと米国間の関係悪化も気になるところだ。欧州圏の経済が芳しくないことやECBの金融政策が追加緩和方向に方針変更されたことに加えて日米と比較して欧州の政権が安定していない中ではユーロが選好される可能性は低く、今月のユーロ相場は上値の重い展開を予想する。

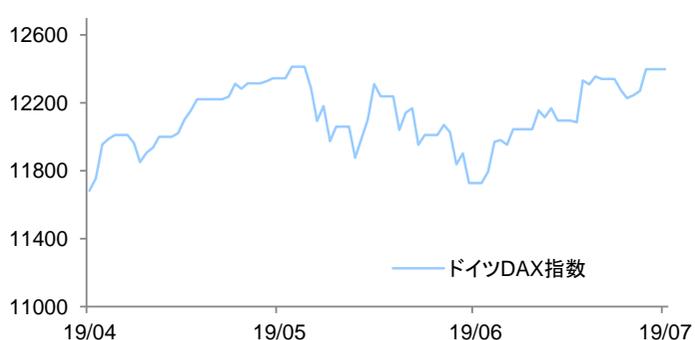
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/3	マークイット1-0圏製造業PMI 確報	5月	47.7	47.7	47.9
6/4	失業率	4月	7.7%	7.6%	7.7%
6/6	ユーロ圏GDP (前期比/前年比)	第1Q	0.4%/1.2%	0.4%/1.2%	0.4%/1.2%
6/6	ECB主要政策金利	6月	0.000%	0.000%	0.000%
6/6	ECB限界貸出ファシリティ	6月	0.250%	0.250%	0.250%
6/6	ECB預金ファシリティレート	6月	-0.400%	-0.400%	-0.400%
6/18	ユーロ圏CPI (前月比/前年比)	5月	0.2%/1.2%	0.1%/1.2%	0.7%/1.2%
6/18	独ZEW指数 (現状/期待)	6月	6.1/-5.6	7.8/-21.1	8.2/-2.1
6/21	マークイット1-0圏製造業PMI 速報	6月	48.0	47.8	47.7
6/27	消費者信頼感	6月	-7.2	-7.2	-7.2

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ/円 見通しまとめ

ブル	12名	1.1250 ～ 1.1550	ベア	4名	1.1125 ～ 1.1450
----	-----	-----------------------	----	----	-----------------------

※ レンジは中心値

田中	ブル	1.1200 ～ 1.1600	イラン情勢に伴うCHFや金の動きを注視。足元のEUR上昇はこれら材料とFED利下げ観測に、クロスを含めたショートあぶり出しによるテクニカル主導の印象。この流れ継続を想定も、景気・政治面で売り材料不変でペースは緩やかか。	竹内	ベア	1.1100 ～ 1.1500	ユーロ圏経済はドイツも失速の兆候が現れる等、減速は顕著。金融政策も更なる利下げを織込む局面。また依然燃る南欧債務問題や不透明感高い政治情勢を踏まえると上値は限定的。ドル安の流れの中で、ユーロ安進行は緩やかなものに。
田坂	ブル	1.1250 ～ 1.1600	欧州景気悪化・ECBのハト派スタンス等が確認される現状、ユーロ特有の買い材料は乏しい状況。しかし、米利下げ観測を背景とするドル下落圧力の強さを鑑みれば、ユーロドルの緩やかな上昇が予想される。	加藤	ブル	1.1300 ～ 1.1600	米製薬会社による今年最大とも言われる大型MAの報道もあり、米国の利下げ観測と相俟ってユーロ買いに安心感がある。但し政治的なイベントリスクは依然残っており、1月の高値を抜くほどではないだろう。
大庭	ブル	1.1250 ～ 1.1550	EU主要ポスト人選協議が混沌とする中、EU委員長にフランス人の可能性が高まれば、次期ECB総裁にはタカ派のバイトマン独連銀総裁が有力視され、ユーロ上昇圧力が強まりそうだ。またドルが相対的に弱含むこともサポートになる。	関	ブル	1.1250 ～ 1.1500	失速するドイツの輸出は、中国をはじめとした新興国の減速の影響でもあり長期化の懸念。然しながらECBの緩和余地はFRBと比べれば限定的であり、対ドルではユーロ高圧力を和らげるも押し返すには至らずか。
高村	ベア	1.1150 ～ 1.1450	ユーロ圏の経済指標の弱さが目立ち、ドラギ総裁は追加緩和を示唆している状況。6月後半のユーロドル反発はドルの短期的なポジション調整が主因であることから、基調として上値の重い展開が続くと予想。	光石	ブル	1.1300 ～ 1.1600	景気減速や伊財政問題、ブレグジット等、ユーロ圏を取り巻く状況を鑑みるとユーロ自体に強気材料はないものの、利下げに舵を切ったドルの下落に支えられる形でのユーロの上昇を見込んでいる。
谷舗	ベア	1.1150 ～ 1.1450	米金利低下を背景としたユーロ買いは一巡したのではないか。ECBが追加利下げを検討していることや、英国でBrexit強硬派の人物が次期首相に選ばれると見込まれるなか、ユーロ相場が騰勢を強める展開は想定しにくい。	岡本	ブル	1.1200 ～ 1.1600	ECBも追加緩和期待が高まっているが、マイナス金利の深堀りが経済成長に繋がるパスは描きにくい。指標の悪化も一段落して底打ちした感もあり、ハト派シフトが鮮明な米FRBのスタンスもあってユーロへの買い戻しに期待。
大谷(未)	ブル	1.1200 ～ 1.1500	欧州経済の先行き懸念や「合意なきブレグジット」への警戒感等の政治リスクは依然としてあるものの、現状FRBによる7月以降の複数回の利下げ観測が強まっている中、引き続きユーロドルは堅調に推移すると予想。	上野	ベア	1.1100 ～ 1.1450	米利下げ観測を市場が急速に織り込む中で、ユーロは対ドルで強含んでいるがそのモメンタムは次第に失速していくと予想。欧州経済は米国経済よりも悪く、ブレグジットなどの懸念材料も残存。ユーロ/ドルは次第に軟調な推移になるのでは。
				玉井	ブル	1.1250 ～ 1.1500	ユーロ圏の経済指標は弱い結果が続いており、ECBはハト派姿勢を見せているものの、FRBのハト派姿勢によるドル売り圧力の方が強く、次回のFOMCでの利下げが意識される中、ユーロ相場は底堅い展開を予想。
				原田	ブル	1.1300 ～ 1.1550	ブレグジット等、欧州における政治リスクは数多く、経済が軟化する中において、ユーロの先行きは不確実性が高い。一方、Fedの次の一手が利下げとなる局面となることから、相対的にはユーロは買われやすい地合いとなる。
				森谷	ブル	1.1250 ～ 1.1500	ユーロ圏の経済指標は冴えない結果が続いている上、Brexit等政治リスクも数多く残っているが、今月はいよいよFRBが利下げに踏み切ると見られ、ドル売り圧力の高まりがユーロ相場を押し上げる展開を予想。
				大熊	ブル	1.1200 ～ 1.1550	欧州の政治は不安定、経済状況も軟調な上、英国が合意なきEU離脱を回避できるかも不透明な状況下、ユーロ買いの材料は見当たらないが、FRBの利下げによる米長期金利低下、ドル売りの流れでは相対的にユーロ高になりやすいか。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.2000 ~ 1.3000
GBP/JPY 134.00 ~ 144.00

欧州資金部 北原 亘

■ 先月の為替相場

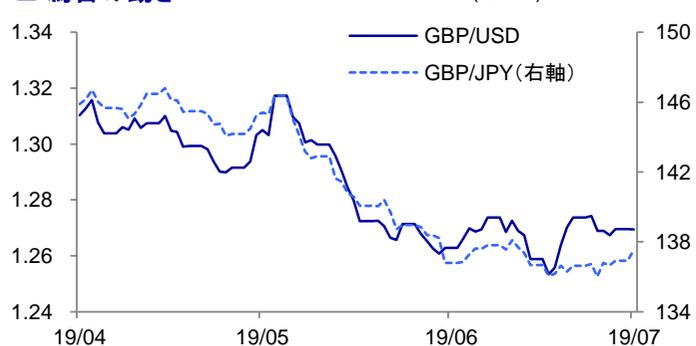
英ポンド相場は6月、欧米金融政策・経済指標に振り回され中旬は値を崩すも往って来い。月初は1.2640でオープン。3日、英5月製造業PMIが国民投票直後、2016年7月以来となる節目の50割れとなるも市場の反応は限定的。4日、パウエルFRB議長が「景気拡大を維持するため適切な行動を取る」と利下げを示唆しドルの上値が重い中、ポンドはじり高。5日の米5月ADP雇用統計、7日の米5月雇用統計は立て続けに低迷、ドル安に拍車をかけ1.27台半ばまで続伸。10日、英4月鉱工業生産・製造業生産が揃って市場予想を下回り反落するも、翌11日には英2~4月雇用統計が賃金・雇業者数ともに市場予想を上振れ、すぐに持ち直した。12日、英下院で「議事進行を1日だけ議会主導とする」野党法案が採決され、ノーディールブレグジット回避を目指す動きが見られたが、同案は309対298票で否決、ポンドは下落。14日、新英首相有力候補のジョンソン前外相が、議会閉鎖による合意なき離脱も辞さない姿勢を示したほか、米5月小売売上高は底堅い米個人消費を示唆しドル高となる中、1.26割れまで続落。翌週17日、前週からのポンド安基調が続く中、5月末の安値1.2560を下抜けると大きく値を崩し、18日には月中安値1.2507まで下落した。同日、ドラギECB総裁が「さらなる利下げも手段の1つ」と追加緩和を仄めかすとユーロ安となる中、ポンドには買戻しの動き。さらに、ジョンソン前外相が10月31日の期限までに離脱する決意について、やや言い回しを軟化させたこともポンドをサポートした。19日、FOMCでメンバーの半数、さらにはパウエル議長が年内の利下げを予想していることが示唆されるとドル安となり、ポンドは1.26台半ばまで急反発。20日、BOE金融政策委員会は市場予想通り政策金利を据え置き。直近で早期利上げの可能性を示唆していたサンダース委員とハルデー委員がいずれも据え置きを支持し、9対0の全会一致での決定となったことには若干の意外性があったが、ポンドへの影響は限定的。同日実施された5回目の英保守党選では、予想通りジョンソン前外相とハント外相の2名が選出され、来月の決選投票に進むことになった。21日、欧州6月PMIの改善を受け、ユーロ買いが進む中、ポンドは一時弱含むも、クラリダFRB副議長が追加緩和の可能性の高まりを示唆するとドル安となり、1.27台半ばまで反発。25日、FOMC後のドル売りの流れが一服、ブラード・セントルイス連銀総裁が7月の50bpの利下げに疑問を呈したこともドル買いを下支えし、ポンドは反落した。26日、カーニーBOE総裁は「合意なき離脱の場合、さらなる刺激策が必要となる可能性」と発言するも、市場の反応は限定的、1.27近辺で引けた。

■ 今月の見通し

7月の英ポンド相場は上値が重く、場合によっては一段安を試す展開になると予想する。英固有材料としては保守党党首選の行方が注目されるが、足元でポンド相場を大きく動かしているのは欧米の金融政策・経済指標であり、そちらから記述する。米雇用統計をはじめとする欧米主要経済指標が大崩れしない限り、7月25日のECB政策理事会では現状の金融政策を維持し、7月31日のFOMCでは25bpの予防的利下げを決定すると考えている。ECBについては、先月18日に10月退任予定のドラギ総裁が追加緩和について言及したことから、7月ないし9月ECB理事会での追加緩和期待が膨らんでいる。一方、追加緩和余地は限定的であり、QE再開・利下げ・ディリング(中銀預金金利の階層化)・ツイストオペと多岐にわたって検討されてはいるが、FRBが利下げに踏み切るまではフォワードガイダンスの変更等で時間を買いたいのが実情だろう。FRBについては、米短期金利市場で7月FOMCにおける25bpの予防的利下げが十分に織り込まれており、一部では緩和効果を最大限に発揮させるため50bpの利下げになるとの見方もある。政策金利の絶対水準が低い今回の局面においては、25bpの利下げに留めつつ、先月FOMCと同様に巧妙に時間を買い、経過を見守っていくと予想する。これらのシナリオに基づけば、過度なハト派期待の剥落が進むにつれてドルやユーロの買い戻し圧力がかけられると考えられ、ポンドの重石となるだろう。その他、7月5日の米6月雇用統計では、7月4日が米独立記念日であるため、市場参加者が少ないことが予想される。2013年7月のように、想定以上の値動きとなる可能性には留意しておきたい。次に、保守党党首選については左記の通り、ジョンソン前外相とハント外相の一騎打ちとなっている。EUとの交渉に関しては、両候補ともにバックストップ案を含まない合意を目指すとしており似通っている。現状はジョンソン前外相が優勢を維持しているが、先月21日にジョンソン前外相がパートナーと口論、警察沙汰になって以降は、人柄が争点に浮上している。世論調査によれば一般有権者の間では、ハント外相の支持率が上回っているとの結果もある。7月9日にテレビ討論会、22日に投票締め切り、23日に新党首発表、24日に新首相答弁、26日から議会の夏休みが予定されており、ノーディールブレグジットを目指す新政府に野党が不信任投票を求めるとすれば7月25日までの提出となる見込み。保守党の一部が造反にまわる可能性も高く、可決されれば総選挙となるが、その場合にはソフトブレグジット・残留派への政権交代、ポンド上昇の可能性も浮上するため、ボラティリティの上昇に注意したい。

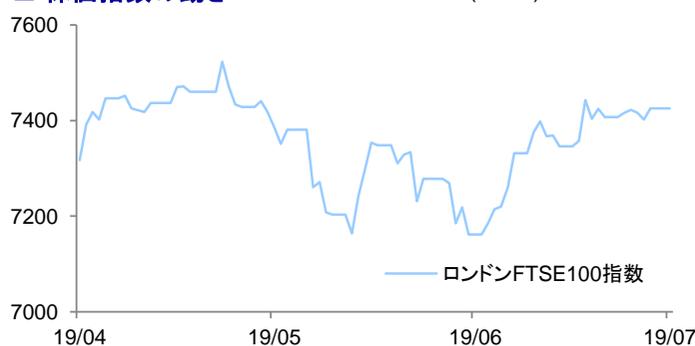
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/3	製造業PMI	5月	52.2	49.4	53.1
6/4	建設業PMI	5月	50.6	48.6	50.5
6/5	サービス業PMI	5月	50.5	51.0	50.4
6/10	鉱工業生産(前年比)	4月	+0.9%	-1.0%	+1.3%
6/10	製造業生産(前年比)	4月	+2.0%	-0.8%	+2.6%
6/11	ILO失業率	4月	3.8%	3.8%	3.8%
6/19	消費者物価指数(前年比)	5月	+2.0%	+2.0%	+2.1%
6/20	小売売上高(含自動車/前年比)	5月	+2.7%	+2.3%	+5.1%

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.6850 ~ 0.7150
AUD/JPY 74.00 ~ 77.00

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 原田 直彦

■ 先月の為替相場

先月の豪ドルは、0.69台を中心に上下する展開となった。月初対ドルで0.69台前半、対円では75円台前半で始まった豪ドルは、米国の豪州への関税見送り、市場予想を上回った中国指標等を受けて0.69台半ばまで上昇。米国の早期利下げ観測も伴って、対ドルで0.69台後半まで買われた。4日オーストラリア準備銀行(RBA)理事会では、市場予想通り政策金利が25bp引下げられ1.25%となったものの、声明文に追加利下げの示唆がなかったことから、対ドルで一時0.6993まで上昇した。その後、ロウRBA総裁の「追加利下げを見込むのは不合理ではない」との発言から、豪ドル売りが進む局面も見られたが、パウエルFRB議長のハト派発言から、対ドルで0.70台前半まで上昇した。5日は豪1~3月期GDP(前期比)が市場予想を下回ると、豪ドルが下落する局面もあったが反応は一時的にとどまり、再び対ドルで0.70台前半まで上昇。7日は弱い米5月雇用統計の結果を受けドル売りが進むと対ドルで一時0.7022レベルまで上昇した。

週央10日は、週末に米国のメキシコへの関税が延期との報道を受け全般的にドルの買い戻しが強まるなかで、0.69台半ばまで下落。12日、RBAのエリス総裁補から、「インフレを生じさせる失業率は4.5%」との発言も出る中、豪ドルは海外時間に値を切り下げ0.6920付近まで下落した。翌13日、注目されていた豪5月失業率は、前月から横ばいの5.2%と予想対比弱めの結果となり、指標後に豪ドルは0.69ちょうど近辺まで下落した。

18日、6月RBA議事要旨は今後の利下げ方向の方針を確認する内容であったことや、豪1~3月期住宅価格指数が市場予想を下回る弱い内容であったことから、豪ドルは値を切り下げ0.6832レベルまで下落する場面もあった。しかし海外時間に、トランプ米大統領から「G20で中国の習主席と会談する予定だ」との発言が伝わると米中通商協議再開への期待感が高まり、豪ドルは大きく反発し、0.68台後半まで上昇した。19日注目の米FOMCでは、大方の予想通り政策金利は据置きも、利下げの可能性を示唆する内容だったことから、豪ドルは大きく反発し0.69台を回復した。20日、前日のFOMCのハト派傾斜を受けたドル下落の流れが継続し、米金利も低下となり、豪ドルはじりじりと0.6930付近まで上昇した。その後中東の地政学リスクへの懸念から0.69台前半で揉みあう展開となったが、24日ロウRBA総裁から「追加の緩和の効果については限定的」とのコメントから、金利が上昇するにつれて豪ドルは0.69台後半まで上昇した。

■ 今月の見通し

7月の豪ドルは、反発の機会を探る展開を予想する。6月は、3年間据置きだったRBAによる25bpの利下げが実施され、政策金利は1.25%となった。月の前半では、ロウRBA総裁から「追加利下げを見込むのは不合理ではない」、またエリスRBA総裁補から「インフレを生じさせる失業率は4.5%」とのハト派的な発言等を受けて、金利市場における利下げ観測についても先行き1年間で2回以上の利下げを織り込む展開となった。一方で月の後半には同じくロウRBA総裁から「追加の緩和の効果については限定的」と景気刺激には金融政策の効果は限定的との認識が示されるなど、中央銀行としても利下げのペースについて見極める段階に入っている様子がうかがえる。7月のRBAにおける利下げについては既に8割程度織り込まれているものの、RBAからのコメントから迷いがみえる状況では、連続的な利下げ観測はやや行き過ぎではないかと考える。

経済指標に目を向けると、RBAが今後を見極めるうえで重要としており、注目されていた豪5月失業率は、前月から横ばいの5.2%となった。新規雇用者数は予想を上回る増加、労働参加率は上昇、フルタイム、パートタイムともに増加と内容はそこまで悪くないものの、雇用者数の増加は5月の連邦総選挙によるもので全般的には弱い内容と解釈された。豪4月小売売上高、豪1~3月期GDPともに改善は見られず、今後は6月に実施した利下げと総選挙における保守連合勝利のポジティブ効果がどの程度实体经济に波及してくるかについて注目が集まる。

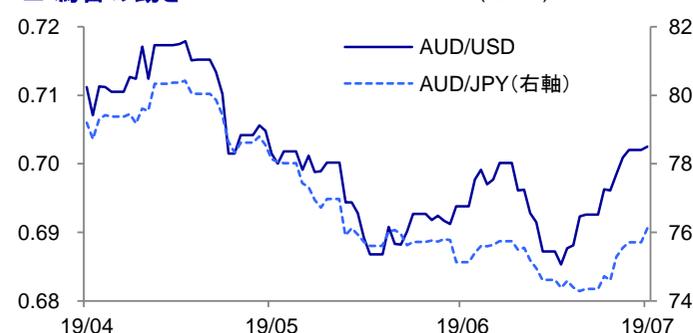
豪ドルについては、これまで豪州の利下げ観測とグローバルな景気の減速、特に中国景気に焦点が当たり下押しプレッシャーが続いてきた。しかし、豪州では既に利下げが速いペースで2回以上織り込み済みであることから、更に利下げが実施された場合においても、豪ドルの下落幅は限定的と考える。また、足元で米国の利下げ観測も急速に高まっており、ドル高修正の流れも豪ドルのサポート材料となる。リスク要因としては、引き続き米中貿易問題の進展と中東関連の地政学的リスクが意識される。予想外の関税実施、中東における不透明性の増大については豪ドルのネガティブ材料となるため、留意したい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のお笑い事情』
オーストラリアのお笑いというよりも、テレビ番組についてですが、日本のテレビ番組で人気のものが多々あります。万国共通の「風雲たけし城」と「料理の鉄人」の認知度はかなり高く、中でも「フレンチノサカイ」の認知度は私の周りでは群を抜いています。一度は訪れてみたいレストランに数えられているようです。他にも、日本の「サスケ」がベースとなった「ニンジャウォリアー」というオーストラリアの番組があり、筋肉ムキムキの人々が様々な障害にチャレンジする姿がオーストラリアでも非常に人気を博しているようです。さすが、筋トレ大国です。

■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/4	小売売上高(前月比)	4月	0.2%	-0.1%	0.3%
6/4	豪州準備銀行理事会	6月	1.25%	1.25%	1.50%
6/5	GDP(季調済/前期比)	1Q	0.5%	0.4%	0.2%
6/5	GDP(前年比)	1Q	1.8%	1.8%	2.3%
6/6	貿易収支	4月	A\$5000M	A\$4871M	A\$4887M
6/13	失業率	5月	5.1%	5.2%	5.2%
6/13	労働参加率	5月	65.8%	66.0%	65.9%

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.3000 ~ 1.3500
CAD/JPY 79.00 ~ 85.00

グローバルマーケット業務部カナダ室 金本 玲子

■ 先月の為替相場

6月のUSD/CADは1.3534でオープン、前月と比べ広いレンジで推移。概ね1.3250~1.3450のレンジで推移。月間高値は1.3535(6/3)、月間安値は1.3151(6/20)。
3日、USDドルは主要通貨に対して下落。米5月ISM製造業景況指数が52.1と市場予想の53.0を下回り、2016年10月以来の低水準となったこと、また米セントルイス連銀のブロード総裁が、近い将来の利下げの可能性に言及したことからUSDドル売りが進み、USD/CADは下落、1.3438でクローズ。さらに4日にはFRBのパウエル議長が「景気拡大を維持するため、適切な行動を取る」と発言、必要なら利下げの可能性も辞さない姿勢を示した。これにより、リスクオフムードが後退、USDドルは主要通貨に対して全面安となり、USD/CADも前日からさらに下落、一時1.3382を付けた。
7日、カナダ5月雇用統計は雇用変化が市場予想0.5万人を上回る2.77万人、失業率は統計を取り始めて以来最低となる5.4%に低下した。一方米5月雇用統計は、非農業部門雇用者数が7万5千人増と市場予想17万5千人増を大幅に下回り、過去2か月分の非農業部門雇用者数も下方修正、平均時給も予想に届かなかった。この結果を受けカナダドルは急進、一時1.3262を付け、7週間ぶりの高値となった。週末、トランプ大統領がメキシコに対する5%の制裁関税発動の無期限見送りを明らかにしたことで、市場の警戒感が後退。カナダドル買いの勢いが増し、10日は1.3249でオープン。
13日、ホルムズ海峡で日本関連船舶1隻を含むタンカー2隻が攻撃を受けたとの報道で原油価格が急伸、USD/CADがやや下落。14日には米がタンカー攻撃をイランの責任と断定、対するイランも米国批判を強めたため、市場はリスクオフに動き、USDドル買いが優勢となったが、その後FOMCまでは1.34近辺での取引が続いた。19日、注目のFOMCの結果は、予想通り政策金利は据え置きとなったものの、声明文で利下げの可能性が示唆され、FRBが前回のFOMCからハト派色を強めているとの市場の見方から、発表後USDドル売りが強まり、USD/CADは1.3280まで下落してクローズ。20日も前日の流れを引き継ぎ、また急騰する原油価格にも支えられ、USD/CADは3/1以来の1.31台を付けた。翌21日も、カナダドル買いが優勢となったが、カナダ4月小売売上高が総合、除自動車ともに市場予想を下回ったうえに、前月から大きく低下。これによりカナダドルが売られたものの、引き続きイラン情勢の緊迫化を受けた原油高が上値を押さえており、24日現在まで1.31後半から1.32前半での取引が続いている。

■ 今月の見通し

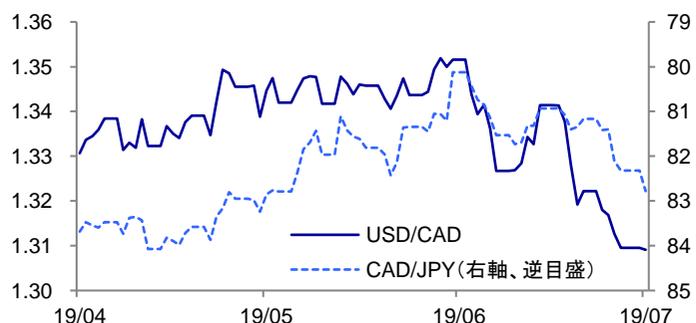
今後注目されるのは、まず6/28、6/29のG20大阪サミットに合わせて開催が予定されている米中首脳会談。トランプ大統領が中国からの輸入品3000億ドル相当に追加関税を課すかが焦点となる。米中首脳会談への期待はあるものの、対立緩和に動くのか、またはさらなる対立を招くのか不透明であることから、米中双方の今後の発言が注目される。
7/10にはカナダ中央銀行の金融政策決定会合が開催される。FRBが予想通り政策金利を据え置いたこと、また欧州中央銀行が利下げの可能性に言及しつつも、早くも実行は9月以降になるとの見方があることから、7月はカナダ中央銀行も政策金利は変更なし、金利政策は引き続き経済データに基づくとの姿勢を維持すると予想される。
FRBのパウエル議長は6/25の講演で「金融緩和の必然性は高まっているが、個別のデータや短期的な心理の振幅に過剰反応しないようにも注意している」と指摘。すでにマーケットは7月のFOMC会合での50ベースポイントの利下げを意識しており、パウエル議長の発言は市場の過度な利下げ圧力を牽制したものと考えられている。
カナダの政策金利に関しても、7月は金利据え置きが予想されるものの、主要国の中央銀行が金融緩和に傾いていることから、今後カナダ中央銀行が利下げに対してどのように言及するかが注目される。前回の会合でカナダ中央銀行は、第2四半期には経済成長が回復するとの見方を示していた。カナダ6月の経済データは予想を上回る結果が多く、また雇用統計は5月、6月発表分ともに好調であったことから、現状では利下げが必要になる経済状況ではないと考えられる。引き続き7月の経済データが好調であれば、カナダドル上昇への圧力になることも考えられる。
その他のリスクとしては、米イラン情勢が挙げられる。マーケットは米国とイランの対立が最悪の事態には至らないだろうと推測しているが、6月後半は両国の挑発的な措置が継続しており、市場はリスクオフの方向に動いている。同時にこの対立により原油価格が上昇しており、カナダドル買いが加速している。世界的な金融緩和の流れに加え、地政学リスクも高まっていることから、当面はカナダドル優勢の相場が続くと推測される。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地のお笑い事情』
カナダを始め、北米のお笑いで主流なのは、スタンドアップコメディイヤーといって、コメディアン一人がマイク一本でステージに立ち、観客に話しかけるスタイルで笑いを取るというものです。綾小路きみまろのようなスタイルというイメージしやすいかと思いますが、トピックは政治、文化、生活、宗教、ジェンダーなど多岐に渡り、ブラックジョークやタブーすれすれの際どい笑いも含まれます。スタンドアップコメディイヤーはTVやNetflixなどで様々なコンテンツが見られますが、コメディイヤーに行くのもおすすめです。ステージを囲む形で席が用意されており、お酒と軽食をつつきながら、コメディアンのお話を楽しめます。お客さんも巻き込んでその場で笑いを作り上げていく雰囲気なので、特にステージに近い席に座ると、コメディアンから話しかけられたり、意見を求められる可能性が高いです。
またコメディイヤーフェスティバルもカナダ各地で開催されており、中でもモントリオールで毎年7月に開催される、“Just for laughs”はビッグイベントで、世界中からコメディアンがパフォーマンスにやってきます。ストリートライブや大道芸人によるパフォーマンスを始め、各会場ではスタンドアップコメディイヤーやコメディイヤーショーなどが楽しめます。Just for laughsは日本で言うドッキリ番組も作成しており、YouTubeで見ることができます。
他にはジョークニュースも面白いです。カナダで知られているのはオンラインジョークニュース「The Beaverton」。一見通常のニュースのようですが、中身はすべて嘘(ジョーク)。日本のエイプリルフルニュースのような記事で構成されています。
ちなみ私は「Kim's convenience」というTVドラマが好きで、次のシーズンを楽しみにしています。トロントでコンビニを営む韓国系カナディアンのお話で、ほっこりした笑いが楽しめます。日本でもNetflixで見られると思います。

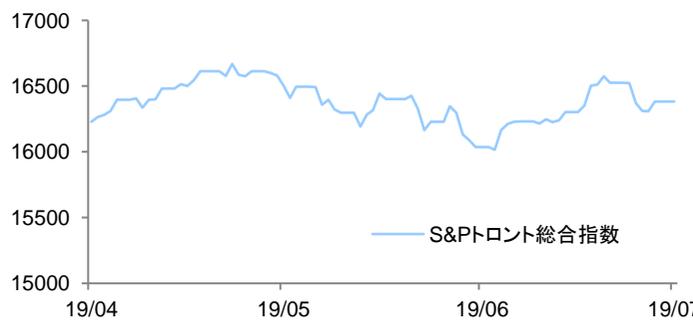
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/3	マクイットカナダ製造業PMI	5月	-	49.1	49.7
6/6	貿易収支	4月	-2.8bn	-0.97bn	-2.34bn
6/7	雇用者数変化	5月	5.0k	27.7k	106.5k
6/7	失業率	5月	5.7%	5.4%	5.7%
6/10	住宅着工件数	5月	207.5k	202.3k	233.4k
6/19	CPI(前月比)	5月	0.1%	0.4%	0.7%
6/19	CPI(前年比)	5月	2.1%	2.4%	2.0%
6/21	小売売上高(前月比)	4月	0.2%	0.1%	1.3%
6/25	卸売売上高(前月比)	4月	0.2%	1.7%	1.4%
6/28	GDP(前月比)	4月	0.2%	-	0.5%

韓国ウォン相場

予想レンジ: USD/KRW 1140 ~ 1190
 KRW/JPY 9.091 ~ 9.615 (注)100韓国ウォンあたりの対円レート
 JPY/KRW 10.400 ~ 11.000

ソウル資金室 下山 泰典

■ 先月の為替相場

6月のドル/ウォン相場は、下落した。月初は、1190.00でオープンし、この日のうちに月高値となる1190.90をつけた。5月から1200を目前にBOK等の当局者から為替に関する牽制発言が入っていたこともあり、投機筋のドルロングポジションの解消の動き等からスタート。月半ばに開催されるFOMC等を控える中で、一般的に動意は限定的。12日にはBOK李総裁から「足元の経済状況の変化に対応するため、適切な措置を取る」旨の発言があり、利下げが意識されるタイミングはあったが、影響は限られた。

その後、18日海外時間に、G20サミットで米中首脳会談が開催されるとの報道があり、センチメントが大きく改善したほか、注目された19日のFOMCでは市場の思惑以上にハト派的な内容となり、ドル売りに拍車がかかった。

その後は、月末のG20を待つ形で動意に乏しい相場展開が継続、1154.70でクローズした。

なお、注目されたG20での米中首脳会談では、貿易協定の再開、第4弾の関税賦課の一旦の見送り、中国通信大手に対する制裁の緩和など、米国が中国に対して一定の譲歩をするような結果で終結した。また、30日には急遽ではあるが米朝首脳会談が開催され、ここでも非核化に向けた対話を再開・加速させることで合意した。

■ 今月の見通し

7月のドル/ウォン相場は、上昇する展開を予想する。

6月の相場は、米中首脳会談への期待やFOMCの市場のハト派的スタンス等を受けてドル安・ウォン高が進行、ドル/ウォンは大きく下落した。

注目された先月末のG20サミットで開催された米中首脳会談では、具体的な合意はなかったが、協議再開では折り合った。対中関税の賦課や中国通信大手への制裁緩和など、米国が中国に一定の譲歩をする内容であるようにも捉えられたが、一旦はリスクセンチメントを回復させる材料として意識されそう。また、北朝鮮との協議再開も、一旦はセンチメントを安定させる要因となる。但し、来年の大統領選挙を睨んだ上で、5Gを巡る覇権争いなどもある中では、今後のトランプ大統領の発言等によってリスクセンチメントが急速に悪化する事も考えられ、その場合にはドル/ウォンが大きく上昇しようから、注意したい。

また、米中貿易摩擦と双壁をなす形で意識されているのがFOMCの金融政策だろう。足元、今月30-31日で開催されるFOMCで利下げがなされることはほぼ確実といえよう。一方、年末までを展望した場合に、市場では既に3回分の利下げ(=75bpの利下げ)が6割ほどの確率で織り込まれており、7月には50bpの利下げがあるのではと見る筋もいる。ただ、さすがにこれらの織込みはやや行き過ぎであるとの印象が強く、7月のFOMCの前にFED高官から徐々に牽制が入ると考えている。実際、FEDメンバーの中で最もハト派的とも言われるブラード・セントルイス連銀総裁も、7月に50bpの利下げは必要ない旨発言しており、7月は行き過ぎた利下げ織込みが徐々に是正されることでややドル高基調になると予想している。

また、FOMCのスタンスに合わせる形でBOKの利下げも意識されている。基本的にはFOMCに追随することが一般的と言われており、7月18日に予定されているBOK会合で利下げが決定されるかはやや微妙なところだが、1回分の利下げは既に織り込まれている認識であり、今後複数回の利下げがあり得るのがポイントとなりえよう。複数回の利下げが示唆されれば、ウォン安基調に転じる可能性がある。

この他、米-イラン間の摩擦もあり、上記もあわせて勘案すれば、基本的には今月のドル/ウォンは上昇基調を予想したい。但し、米中間の摩擦がこのまま急速に改善するといったシナリオがあれば、急速なウォン高も考えられるため、引き続き上下双方向に注意を払いたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のお笑い事情』

韓国でお笑いといえば、スタンドアップコメディよりは、バラエティー番組が人気です。アジアで人気のある「ランニングマン」や、秋山成勳さんの家族が出演した「スーパーマンが帰ってきた」、「無限挑戦」、「週間アイドル」等、日本でもご覧になった方々もいらっしゃるのではないのでしょうか。

そんな中、最近私がハマっているのは、「現地で食べてくれるかな?」、「スミのおかず」という番組です。

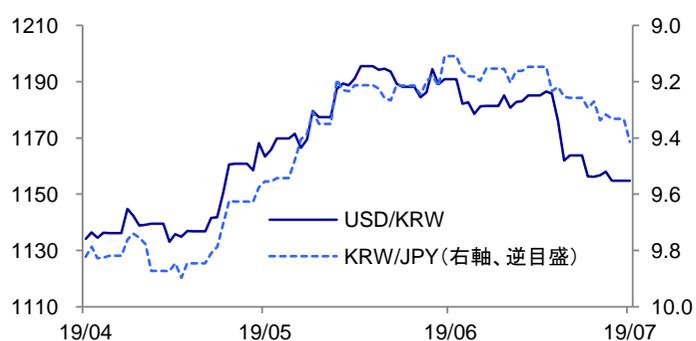
2つとも料理に関するバラエティなのですが、「現地で食べてくれるかな?」は、韓国で有名な中華料理シェフ、イ・ヨンボクさんとタレントたちが海外に行って、韓国風の現地料理を販売するキッチンカー運営に挑戦する内容。シーズン2は中国で韓国風のジャージャー麺やチャーハンなどを売って大繁盛でした。既にシーズン3が放送中ですが、アメリカや新大久保でも大人気なハッドグ(ホットドッグ)では、チーズが入っているハッドグを食べているアメリカ人の反応が面白かったです。

「スミのおかず」は、韓国ではお母さんキャラクターで大人気な女優、キム・スミさんが有名なシェフたちとおかずを作りながら、韓国のバンチャン(おかず)文化のお話や自分のノウハウを伝える番組です。簡単で作りやすく、美味しいレシピを紹介してくれますし、イタリアンや中華料理等を専門とするシェフたちが、家庭食作りで困っているシチュエーションが笑いを誘うので、主婦に限らず全世代で人気です!この前は、海外で韓国のおかず文化を知らせる為に、グアムや新大久保でも期間限定の食堂も開きました。現在では、新大久保で「スミね食堂」というお店が営業中とのことですので、スミさんの味が気になる方は是非訪ねてみてください。

また、ケチャップかけたハッドグを、チーズをのぼしながら食べると、とっても美味しいので、是非オススメです! (Yoo Jiwon)

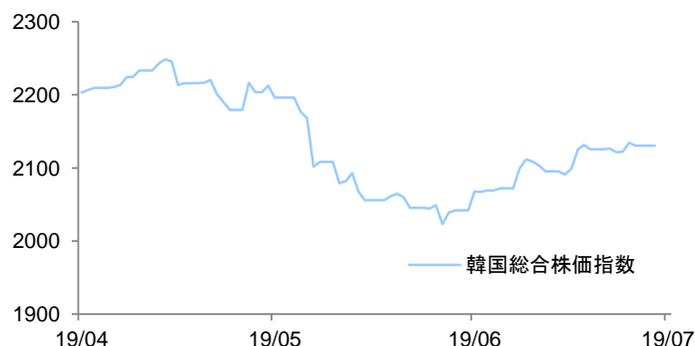
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/1	輸出(前年比)	5月	-6.6%	-9.4%	-2.0%
6/1	輸入(前年比)	5月	0.5%	-1.9%	2.4%
6/4	GDP(前年比、確報値)	1Q	1.8%	1.7%	
6/4	CPI(前年比)	5月	0.8%	0.7%	0.9%
6/5	経常収支(国際収支ベース)	4月	-	-\$664.8M	\$4819.6M
6/5	貿易収支(国際収支ベース)	4月	-	\$5668M	\$8467.3M
6/12	失業率	5月	4.1%	4.0%	4.1%
6/25	消費者信頼感	6月	-	97.5	97.9

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 30.60 ~ 31.50
TWD/JPY 3.35 ~ 3.55

台北資金室 三浦 勇二

■ 先月の為替相場

6月のドル/台湾ドル相場は、ドル安台湾ドル高。

月初のドル/台湾ドルは31.600でオープンすると、前週にトランプ米大統領がメキシコからの輸入品に5%の関税を課すと表明し、米金利が大幅に低下する流れを受け、ドル/台湾ドルもドル売り台湾ドル買いの展開となり、31.4台へと下落。その後もブラード・セントルイス連銀総裁が「近く利下げが正当化される可能性がある」と発言すると、FRBの利下げ観測が強まり、米金利の低下が継続。ドル/台湾ドルは6/5にかけて31.342まで下落した。

その後は、ドル/人民元の人民元安推移からドル買い台湾ドル売りが優勢となる一方、株価の堅調な推移がドル/台湾ドルの上値を押さえる展開。また、FOMCの結果待ちで市場参加者の様子見姿勢も次第に強まり、月半ばにかけては31台半ばのレンジで推移した。

月後半に入ると、6/19には前日海外時間にトランプ米大統領が習中国国家主席と電話会談を行い、「とても良い電話会談ができた」と述べたことをきっかけに、米中通商協議進展への期待感が広がり、株式市場へ海外資金が大幅に流入。台湾ドル買いの流れとなり、31.3台までドル/台湾ドルは下落した。さらに、注目されたFOMCでは、政策金利は据え置きとなったものの、今後の利下げの可能性が示唆されたほか、景気判断の下方修正もあり、会合後はドル安が進行。ドル/台湾ドルは6/21に31ちょうどの安値をつける展開となった。月末にかけても、株式市場へ海外資金の流入が続いたほか、輸出企業のドル売り取引の増加により、ドル/台湾ドルは上値重く推移した。

なお、台湾中央銀行は、6/20に四半期に一度の金融政策決定会合を開催したが、政策金利である公定歩合は1.375%で据え置かれ、市場では特段材料視されなかった。

■ 今月の見通し

7月のドル/台湾ドル相場は、上値の重い推移を見込む。

6月に発表された台湾の経済指標では、5月の輸出額が前年比▲4.8%の減少となった。米中貿易戦争の激化を受け、全体の約40%を占める中国・香港向け輸出が同▲6.9%と大きく落ち込んでいることが主な要因となり、7か月連続でのマイナス成長となった。製品別では、米国向け輸出の増加により、IT・通信製品は20%超の伸びをみせたものの、そのほかの金属製品や化学品などは伸びがマイナスとなり、全体の輸出額の縮小につながった。5月の消費者物価指数は、総合が前年比+0.94%、変動の大きい生鮮食品を除いたコアは同+0.62%で、緩やかなインフレが続いていることを示す結果となった。なお、5月の外貨準備高は4,644億ドルで4月から減少。台湾中央銀行は、5月は為替の変動(急速に台湾ドル安が進行)が大きかったことから、市場介入を行ったことが要因と説明している。

7月は引き続き、米中通商協議の行方ならびに、FRBの金融政策が注目される。

米中通商交渉については、6月後半に、トランプ米大統領が「(習中国国家主席と)とても良い電話会談ができた」と述べたことのほか、ムニューシン米財務長官が「米中貿易合意は90%完了した」と発言したことから、協議前進への期待感が大きく膨らんでいる。G20に合わせて開催される首脳会談の結果次第ではあるものの、市場の期待通りに、解決へ向けて進展がみられれば、為替市場では人民元が買われるにつれ、ドル/台湾ドルは台湾ドル高方向へ推移しやすいか。

FRBの金融政策に関しては、7月に開催される次回FOMCにおいて、利下げが決定されるかが注目点となる。足元、株式市場は利下げ期待を好感して堅調に推移しているが、今後、FRBのハト派姿勢が一層強まるような場合、海外からの資金フローも増加し、ドル/台湾ドルは台湾ドル高圧力が強まることが想定される。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のお笑い事情』

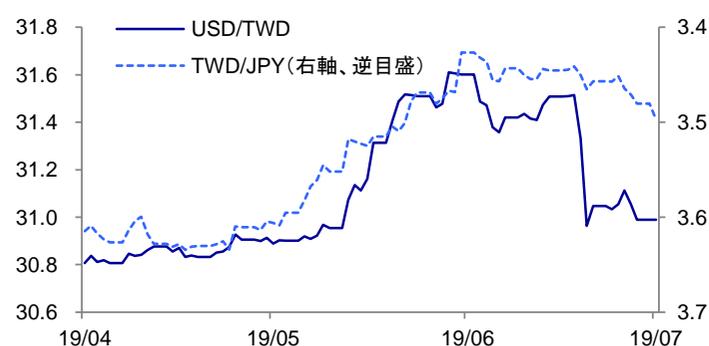
日本でお笑いというと、テレビのコント番組などを思い浮かべることが多いかと思われそうですが、インターネットの影響力が強い台湾では、テレビに加え、FacebookやYouTubeなど、インターネット上で活躍するお笑い芸人が多いということが特徴です。

そうしたインターネット上で有名になったお笑い芸人のひとりが蔡阿嘎です。大学を卒業した2008年からYouTubeにお笑い動画や台湾の時事問題に関する動画をアップし始め、世間に知られるようになり、その後、音楽、旅行、台湾語教育など、幅広い分野の動画も作成、配信し、人気を集めてきました。2014年には、YouTubeで100万回再生も記録したようです。

最近では、こうした人気を背景に、蔡台湾総統や柯台北市長などの大物政治家も蔡阿嘎のYouTube番組に出演し、イメージアップを試みています。もはや、お笑いの域を超えて活躍するYouTuberとなっています。

■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/5	外貨準備高	5月	-	464.43B	464.83B
6/5	CPI (前年比)	5月	0.84%	0.94%	0.66%
6/10	輸出 (前年比)	5月	-3.50%	-4.80%	-3.30%
6/10	輸入 (前年比)	5月	-0.90%	-5.90%	2.60%
6/10	貿易収支	5月	3.47B	4.49B	2.69B
6/20	政策金利	-	1.375%	1.375%	1.375%
6/20	輸出受注 (前年比)	5月	-6.00%	-5.80%	-3.70%
6/24	失業率	5月	3.70%	3.75%	3.73%
6/24	鉱工業生産 (前年比)	5月	-1.54%	-3.05%	1.41%

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7800 ~ 7.8400
HKD/JPY 13.50 ~ 14.10

香港資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【6月の香港ドル直物相場】

6月の香港ドル相場は、FRBが金融政策を方向転換し、利下げを示唆したことからドル売りが優勢となり、年初来高値となる7.8025ドルまで上昇した。同時に香港ドルの流動性がタイト化し、香港ドル-米ドル金利差はプラスに転じた。その結果、キャリー狙いで構築されていた米ドル買い/香港ドル売りポジションが一気に解消される形となり、香港ドルを押し上げる要因となった。また、香港ドル1Yフォワード・ポイントは香港ドル-米ドル金利差の縮小を受け、約2年6か月ぶりの高水準となる▲20ポイントまで上昇した。一方で、大規模なデモによって一時的に、政治的リスクや資本流出圧力が高まり、投資家の香港ドル建資産が減少し、香港ドル需要が減少する場面もみられた。

【6月の香港ドル金利市場】

香港ドルの流動性状況については、HKMAの決済性預金残高が543億香港ドルと低い水準となったこと、また四半期末という季節性要因や新規株式公開申請、大規模デモによる政治的リスクの高まり等から流動性がタイト化し、金利は短期中心に上昇した。FRBが利下げ局面に入ろうとしている中、香港ドル金利においては上記の要因が短期的には支配的となり、流動性はタイト化した状況が継続し、短期の香港ドル金利は上昇。1か月物HIBORが2.63%、3か月物HIBORが2.556%とそれぞれ約10年ぶりの高水準まで上昇した。また、香港ドルHIBOR-米ドルLIBORの金利差は6月中旬以降プラスで推移しており、米ドル買い/香港ドル売りのキャリートレードが機能しなくなった。また、注目すべき点として、香港の銀行の多くが香港ドルの3か月物定期預金金利を2%前後まで引き上げたことが挙げられる。これにより、香港ドルの流動性逼迫化が再確認され、香港ドル金利の年内見通しが引き上げられた。なお、短期の香港ドル金利、長期金利は米ドル金利の大幅低下に伴い低下している。

【6月の香港株式市場】

ハンセン指数 (HSI) は、FRBの利下げ観測やG20サミットにおける米中通商協議再開に向けた楽観的な見方が広がったことで、約5か月ぶり安値であった26,671から28,000付近へ反発した。一時は大規模デモによる政治的リスクが懸念されたが、短期的な動きに留まっている。

■ 今月の見通し

【7月の香港ドル直物相場】

7月の香港ドルは、7.78-7.84付近でレベルするものと予想。香港ドル-米ドル金利差がプラス圏に反転したことは、米ドル買い/香港ドル売りのキャリートレードが減少することを示唆しており、香港ドル買いへの巻き戻しの流れが、一時的に香港ドルを7.80レベルへ押し上げる可能性がある。ただし、香港ドル金利は米ドルとのペッグ制の下、FRBによる利下げ局面における米ドル安に連られる可能性が高く、一過性要因の後、香港ドル-米ドル金利差が縮小すれば、7.80レベルからは売り戻されることになるだろう。また、大規模デモ等政治的先行き不安からくる資本流出リスクの高まり、貿易戦争リスク (G20 サミットにおける首脳会談の結果に大きく左右されるが)、過度に膨らんだ香港ドル建資産の大幅見直し等、各種要因によって依然香港ドルの上値は重く推移するものと考えられる。

【7月の香港ドル金利市場】

四半期末を越えた後も、7月の香港ドル金利は近く予定されている新規株式公開や仮想銀行との競合等によって、底堅く推移するものと予想。香港ドル金利は、足元HKMAの決済性預金残高が低水準であることに加え、政治的リスクの高まりと流動性のタイト化により、大きく上昇する可能性があるだろう。香港ドル金利が上昇すれば、相場に敏感な投資家が、大きく買い越しとなっている香港ドル資産を売り始めることとなり、資本流出圧力は高まるだろう。但し、中期的には、香港ドルは米ドルとのペッグ制の下、利下げ局面に入った米金利の低下に追随するはずであり、香港ドル金利上昇の一服するものと考えられる。

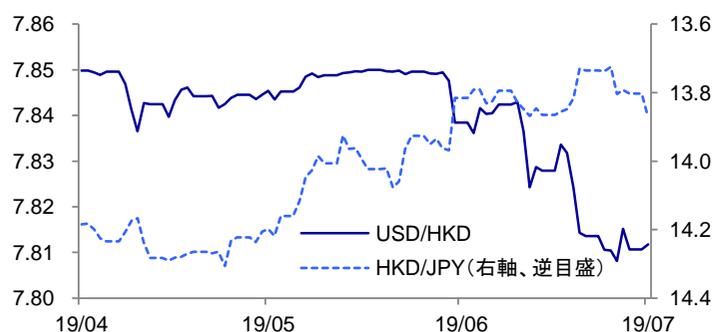
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のお笑い事情』

香港で最も人気のあるコメディアンといえば、それは間違いなくスティーブン・チャウ・シン・チーさんです。彼は、1990年頃から個性派俳優として香港コメディシリーズを次から次へと制作し、多くの観客を魅了しました (信じられないかもしれませんが、これらのコメディ映画は昔のものも含め、今なお週末にテレビで繰り返し放送されています)。今では香港だけでなく、北京語に翻訳されて中国本土でも放送され、とても人気があります。

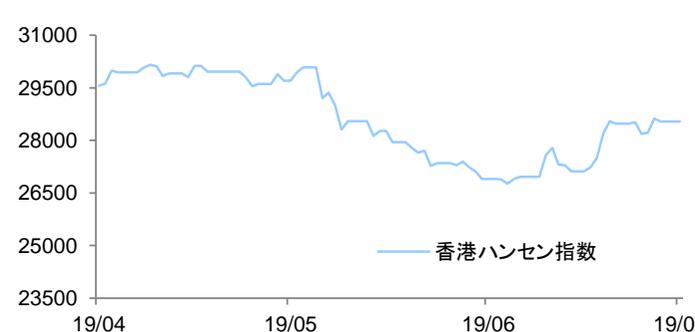
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/6	外貨準備高	5月	-	\$437.8b	\$436.4b
6/14	鉱工業生産(前年比)	1Q	-	1.4%	1.2%
6/14	PPI 前年比	1Q	-	0.8%	0.3%
6/19	失業率(季調済)	5月	2.8%	2.8%	2.8%
6/21	CPI(前年比)	5月	2.8%	2.8%	2.9%
6/21	総合国際収支	1Q	-	\$32.96b	\$24.00b
6/21	国際収支:経常収支	1Q	-	\$36.57b	\$40.39b
6/25	輸出(前年比)	5月	-4.5%	-2.4%	-2.6%
6/25	輸入(前年比)	5月	-5.8%	-4.3%	-5.5%
6/25	貿易収支(HKD)	5月	-36.8b	-34.7b	-35.1b

中国人民元相場

予想レンジ: USD/CNY 6.7000 ~ 7.0000
 CNY/JPY 14.86 ~ 16.27
 100JPY/CNY 6.1500 ~ 6.7300

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 竹本 寛

■ 先月の為替相場

6月のUSD/CNYは下落した。

6月のUSD/CNYは6.92レベルでスタート。序盤にはオンショア市場が休場となった7日、易綱・中国人民銀行総裁が「人民元に関して具体的にどの水準が重要ということはない」という趣旨の発言をしたことで、これが節目とみられていた1ドル=7人民元の水準を下回る元安要因と市場に受け止められ、オフショアUSD/CNHが上昇。休場明けのオンショアUSD/CNYも先行していたオフショアレートを引き上げられる形で一時6.93台半ば付近へ上伸。10日に発表された中国・5月外貨準備高が事前予想に反し、増加する結果となったこともサポートとなった。しかしながら、PBoC仲値が引き続き元高水準で設定されたことや、11日には中国人民銀行が香港市場で人民元建て手形を発行する方針を明らかにしたことが人民元安の進行を抑制し、USD/CNYはさらに上値を伸ばす展開とはならず。

中旬以降は米中通商交渉に進展が見られない中、6月FOMCを控えてUSD/CNYは6.92付近でもみ合い推移が継続していたが、18日にトランプ大統領と習近平国家主席と電話会談を行い、G20にて米中首脳会談が開催される見通しであることがトランプ大統領から表明されると、先行して下落していたオフショア人民元に追随する形でUSD/CNYも下落。19日のFOMCでは声明文で政策金利決定の判断に対して「辛抱強く臨む」という文言が削除されるなど、次回7月会合での利下げ期待の高まりを受けて、ドル全面安の展開にUSD/CNYは下げ幅を拡大させた。その後、21日に一時6.83台を示現する場面も見られたが、この水準ではUSD/CNYに買いが入り、同日夜間取引終値ベースで6.86台後半まで急反発し第3週目を終えた。

最終週は前週のイランによる米無人偵察機撃墜に端を発した地政学リスクの高まりを背景にドルは主要通貨に対して売りが先行したものの、G20や米中首脳会談を前に不透明感からUSD/CNYは底堅さを見せ、26日には一時6.89台前半まで回復、本稿執筆時点では6.87台で推移している。

■ 今月の見通し

G20およびその後開催される予定の米中首脳会談をもって、USD/CNY相場の方向感が大きく変わる可能性は高くなく、7月は元安優勢地合いと予想する。

6月の米中通商交渉は両国の距離が縮まらない状況が継続していたが、18日にトランプ大統領と習近平国家主席が電話会談を実施し、本稿執筆時点では29日に米中首脳会談が実施される方向で調整が進んでいる。ただし、首脳会談にむけた準備時間が少なく、会談時間も限定的なことから、両国の関係を大きく且つ根本的に変化させるイベントとはならないと考えられる。

足元では期待と不安両面のヘッドラインが確認される。21日には米国がすでに華為技術(ファーウェイ)などが対象となっているブラックリストへ中国の5つの組織を追加した一方、その後中国が米フェデックス社をブラックリストに追加することを検討しているとする報道があった。他方で25日には米国が第4弾の3,000億ドル相当の中国製品に対する関税発動を留保する可能性があるとの報道されるなど、現時点において通商交渉の先行きは不透明感が強いままである。今回の首脳会談において何かしらの合意があれば、根本的な進展材料が出てくる可能性は低く、マーケットに対する反応も短期的かつ限定的で相場の方向感を大きく転換させるイベントとはならないだろう。

USD/CNYについて言えば、首脳会談後に通商交渉進展にかかる前向きなヘッドラインを受けて一時的な下落を見せたとしても下押しは限定的、先行き不透明感の熾りに7月も元安圧力は相応に維持されると予想する。さらに、7月末にはFOMCが開催される予定であるが、6月FOMCにおけるハト派に傾斜した声明文もあり、FF金利先物にみる7月会合での利下げは完全に織り込まれている。米中通商交渉に大きな進展がなく、想定通り25bpsの利下げの実施がなされた場合のドル安の影響も限定的となる。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のお笑い事情』
 中国のお笑いには大きく分けて「相声(シャンシェン)」と「小品(シャオピン)」があります。

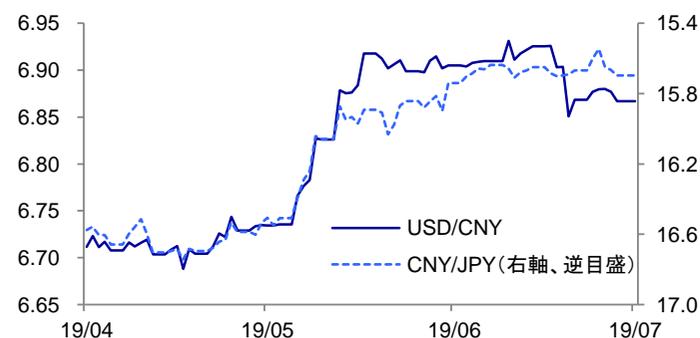
「相声」は日本の漫才に似ており、清の時代に成立したとされる伝統芸能です。ボケとツッコミがいる所謂日本の漫才に近いものから、漫談や落語のようなイメージで一人で話すもの、さらには三人以上で話すもの(群口相声)と、バリエーションは幅広いです。日本と異なる点で言えば、漫才を行う場合、日本ではまずはコンビを組んでコンビ名を付けることがスタートになるかと思いますが、中国では相方が変わる場合も多々あり、コンビは組まずに個々人の名前で活動していることが多いということです。

「小品」は日本のコントに相当し、舞台上で学校や職場など身近な設定で劇を行います。発祥は演劇学校の実技試験科目だった寸劇とも言われています。長さは20分程度が一般的で、日本のコントと比較すると長めのイメージです。

上海に着任した日、テレビをつけるとドラマ仕立てのバラエティ番組が放送されていました。会話の内容は全く聞き取ることはできませんでしたが、映像から笑うポイントなどは理解することができ、笑いは世界共通なんだなど実感しました。また、中国語字幕もついていることが多いので、楽しみながら中国語を学ぶにはとても良い教材なのかもしれませんね。

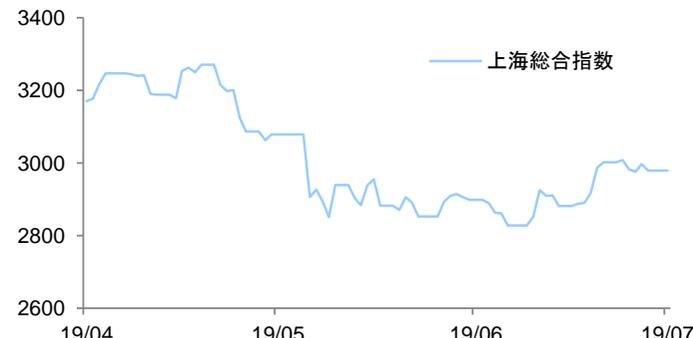
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/3	製造業PMI	5月	50.0	50.2	50.2
6/3	サービス業PMI	5月	54.0	52.7	54.5
6/10	輸出(前年比、RMB建)	5月	-3.9%	1.1%	-2.7%
6/10	輸入(前年比、RMB建)	5月	-3.5%	-8.5%	4.0%
6/12	CPI(前年比)	5月	2.7%	2.7%	2.5%
6/12	PPI(前年比)	5月	0.6%	0.6%	0.9%
6/14	鉱工業生産(前年比)	5月	5.4%	5.0%	5.4%
6/14	小売売上高(前年比)	5月	8.1%	8.6%	7.2%

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3450 ~ 1.3700
SGD/JPY 78.00 ~ 81.00

アジア・オセアニア資金部 前川 真也

■ 先月の為替相場

6月のシンガポールドル(SGD)相場は、米利下げ観測の高まりを背景にUSD売りSGD買いが強まった。5月にSGDが急落となった展開から一転、SGDは1.37台後半から1.35台前半まで買い戻された。

第1週及び2週、アジア株は総じて軟調となったものの、SGDは米金利低下に支えられ緩やかに上昇。ブロード・セントリス連銀総裁が利下げは「近く正当化」される可能性があるとの考えを示したことから、米利下げ観測の高まりを背景にUSD売りSGD買いが優勢となった。加えて、パウエルFRB議長が世界的な貿易戦争に起因するリスクに適切に対応する旨発言、年内の利下げの可能性を示唆したとの受け止めが広がるとSGDは1.36台半ばで買われた。

第3週、10日メキシコへの追加関税回避を手掛かりに、USD買いが優勢となる中、SGDは1.36台後半で推移。12日、星4月小売売上高が市場予想を下回る内容となり、SGDは1.36台後半で軟調推移。14日イラン近海ホルムズ海峡付近で日本の積荷を積んだタンカーが襲撃を受けたことを受けて、リスクオフの動きが強まる中、SGDは1.37台前半まで売られた。

第4週、FOMC(18・19日)を控え、SGDは小動きが継続。19日米貿易摩擦への懸念が和らいだことに加え、FOMCで年内の利下げの可能性を示唆したことを受けてSGD1.35台半ばまで買われる展開となった。20日以降、FRBのハト派的な姿勢はアジア通貨のサポート材料となり、SGDは1.35台半ばまで買われた。

第5週、24日星5月CPIが発表となり、前年同日対比+0.9%と市場予想を上回る結果となり、発表直後SGDは買われた。週末にG20や米中首脳会談を控えて、新規材料難の中、SGDは1.35台で小動きとなった。

■ 今月の見通し

7月のシンガポールドル(SGD)相場は、月末に開催されるFOMCを控え米国の利下げ観測が高まる中、ドル売りSGD買いが緩やかに進行する展開となろう。市場では、7月の利下げがほぼ織り込まれており、市場心理を色濃く映し出す株価は利下げ期待を背景に騰勢を強めている。リスクセンチメントは改善しており、SGDは堅調に推移しよう。但し、米中貿易摩擦や米イランの軍事衝突等リスク要因に係るニュースヘッドラインは警戒が必要だろう。

5月以降、米中通商協議を巡る楽観的な見方が後退、長期化の様相を呈している。G20で米中首脳会談が実施され、ひとまず追加関税第4弾に早期に踏み切る可能性は低下しているものの、依然として米中貿易摩擦懸念の不透明感がリスクオフ要因として存在。また、米国が対イランに追加制裁を科し、両者の関係が悪化しており、軍事衝突のリスクが燃えている状況。上記トピックがフォーカスされるタイミングではUSD買いSGD売りが強まる可能性はある。

また、5月末に米財務省から公表された為替政策報告書では、今回も為替操作国認定はなかったが、監視リスト対象国は6カ国から9カ国へ増加。監視リストには中国を筆頭に日本、韓国、ドイツといった馴染みの国々が掲載される一方インドやスイスは除外された。その代りにシンガポールをはじめアイルランド、イタリア、ベトナム、マレーシアが新たに加わった。今のところ、為替市場の反応は限定的だが、米国が新たに追加国への保護主義的圧力を強めた場合、通貨安の圧力に直面する可能性がある。上記為替報告書を受けてシンガポール金融管理局(MAS)は、「MASは輸出での優位性や経常黒字を実現するための為替レート利用を行っておらず、利用することもできない」と表明し、輸出競争目的の為替操作を否定した。

ファンダメンタルにおいて、6月発表されたMAS実施のエコノミスト調査ではシンガポール2019年通年GDP見通しは、前年比+2.1%(3月時点: +2.5%)と引き下げられた。世界経済がピークアウト、製造業の生産の低迷が続くと予想され、ファンダメンタルズについても引き続き注視する必要があるだろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のお笑い事情』
日本はお笑い文化が多様ですが、世の人々がいつも陽気に面白いことを言っているかという、そうとも言えません。逆にシンガポールは、お笑い文化は皆無な印象ですが、世の中の人々は陽気なので、お笑い事情と国民性は関係ないような気がします。
で、全く思い当たらないのですが、同僚に確認してみたところ、よく分からないと言いながらも絞り出してくれたものを紹介します。

The Noose
すでに終了したものの、ニュース番組を舞台にした人気のコメディ番組。取り上げられるすべてのニュースは嘘であるというナレーションがわざわざ冒頭に入ります。

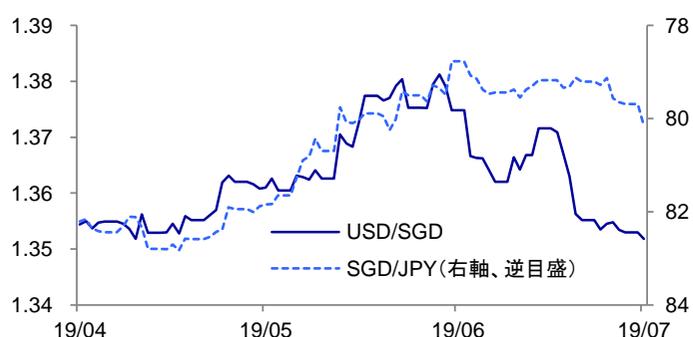
SGAG
Your daily dose of Singaporean Humourとのことで、ちょっとした小ネタ画像が中心のサイト、アプリです。

スタンドアップ コメディ
スタンドアップコメディを観ることが出来るようです。夜10時開始で深夜まで飲みながら聞いたり、The Merry Lionというコメディ専用劇場もあるようです。

その他、日本からも立川志の輔さんが何度も来られたり、今年は吉本新喜劇も立ち寄るようです。
(辻野 順治)

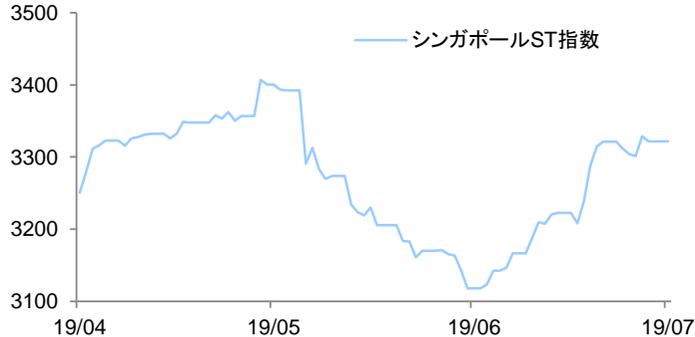
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/3	購買部景気指数	5月	50.1	49.9	50.3
6/12	小売売上高 (前年比)	4月	-0.2%	-1.8%	-0.9%
6/17	非石油地場輸出 (前年比)	5月	-16.5%	-15.9%	-10.0%
6/24	CPI (前年比)	5月	0.6%	0.9%	0.8%
6/26	鉱工業生産 (前年比)	5月	-1.8%	-2.4%	0.1%

タイパーツ相場

予想レンジ: USD/THB 30.00 ~ 31.30
THB/JPY 3.43 ~ 3.52

バンコック資金室 橋 雄史

■ 先月の為替相場

月初3日のドルパーツは31.50近辺でオープン。タイ休日となる中、前週末の流れを引継ぎ、下落基調を継続。海外時間にブラッド・セントルイス連銀総裁がハト派な発言をすると米利下げ観測が強まり、ドルパーツは31.30付近まで下落。4日はタイでは5月消費者物価指数が発表され、前年同月比+1.15%と23ヶ月連続で上昇となるも、相場への影響は限定的となった。5日は月間高値31.50近辺まで上昇するも勢いは続かず、6日は前日に5月ADP全米雇用リポートが前月27万1000人増加から2万7000人増加に急減速すると、米利下げ期待が加速。7日朝方にドルパーツは31.30付近まで下落した。週明け10日は直近安値の31.20台から一時31.40に迫るところまで戻す場面も見られたが米5月米雇用統計が全般的に弱い結果となったこともあり、ドルパーツはじりじりと下落。13日はタイ工業連盟 (FTI) が発表した5月自動車生産台数が前年同月比▲6.1%と、8カ月ぶりに減少したものの、相場への反応は限定的となった。しかし6月に入って加速した海外投資家からのタイ債券市場への資金流入を背景に、ドルパーツは14日にかけて31.10台半ばまで下落。18日にはトランプ米大統領による「中国の習主席ととても良い電話会談をし、G20では時間をかけて会談する予定だ」との発言を受け、米中通商協議再開への期待感が高まり、31.40近辺まで上昇した。19日はFOMC結果が予想比ハト派な内容となると米金利が大きく低下し、ドル安が進行。20日は海外からの資金流入が継続し、ドルパーツは心理的な節目31.00を下抜け、30.90まで下落。21日から24日にかけてはドル安基調が継続し、また週末にG20を控える中で積極的な売買は控えられるも、アジア通貨並びに新興国、資源国通貨が全面高となると、パーツ相場も上昇。ドルパーツは30.65を割込み、下げ幅を拡大。25日朝方には年初来安値を更新し、一時30.60に迫る展開。しかし、タイ5月鉱工業生産指数が発表され、前年同月比3.99%減少の結果を示したことに加え、押し目買いから反転上昇を見せると、30.80近辺まで上昇。26日はハト派なブラッドセントルイス連銀総裁が年内の0.50%の利下げには消極的なスタンスを見せたことからドル買戻しが強まり、30.85近辺まで大きく上昇。その後、タイ中銀の金融政策委員会で政策金利が現行の1.75%に据え置かれ、タイ中銀からは利下げに関するヒントが示されなかったことから、結果後には再びパーツ高が強まり、ドルパーツは30.70近辺まで下落する展開となった。

■ 今月の見通し

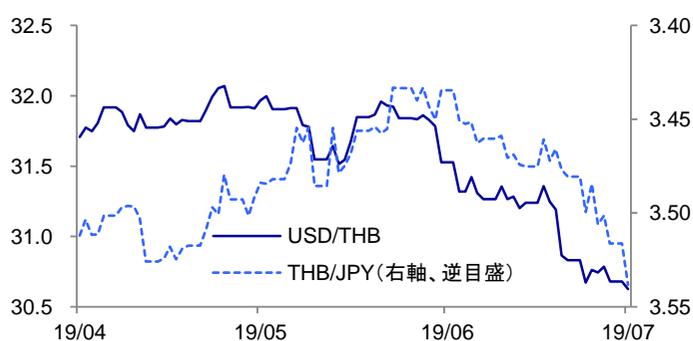
7月のドルパーツは上値重い展開を継続か。
6月のドルパーツは年初来安値を更新すると共に、為替水準としても約6年ぶりの安値圏まで下落した。タイの経済指標は軟調な結果を示しているのに、どうしてこんなにパーツは買われるのかといった疑問が残るところであるが、経済大国である米国が金融政策の転換期に差し掛かっている状況下、この大波に逆らうことは難しいのも事実といえよう。2013年のバーナンキショックから早くも6年が経過し、米国はこの6年間を通じ、大きく拡大したバランスシートを引き締め、9回の利上げを実現してきたわけだが、これ以上の金融引締めには危機感を感じる環境であるのも事実。リーマンショックから10年以上が経過し、10年サイクルでやってくるという大ショック相場は今のところ兆候は見られないが、市場参加者であれば、誰もが近い将来やってくるかもしれない大相場に身構えたいというのが心情であろう。足元の市場のテーマは、①米国の年内利下げ動向と②G20での米中通商協議の進展状況となるが、前者については先日のFOMC結果を受けて、相応に市場折込みが進んだ印象である。後者については、本欄執筆時点においては、交渉状況を静かに見守る状況となっており、米国と中国の追加関税合戦に終わりが見えるのか、期待と不安が入り混じっている。
タイ国内環境に目を向けると、6月26日に実施されたタイ中銀の金融政策委員会では政策金利が1.75%に据え置かれた。ここ数ヶ月に渡り、軟調に推移している貿易データや弱い経済指標を鑑みると、年内利下げの可能性も検討余地があると思われたが、タイ中銀からは利下げのヒントは示されなかった。ドルパーツは年初来安値を更新し、パーツ高が進んでいる状況であるが、タイの国内政治イベントを一通りこなしたことに加え、タイ国債の長期金利が米国債を上回っていることから、海外投資家を中心にタイへの投資意欲は継続する展開を予想する。チャートのにも明確なサポートラインがなく、下値追いの展開になりやすいことから、G20で過度に悲観感が強まらない限り、ドルパーツ相場の上値の重い展開はもうしばらく継続するのではなかろうか。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のお笑い事情』
今月のテーマはお笑いということで、本来はお笑い番組や芸人について書きたいところなのですが、日常会話でお笑いの話になることは少なく、タイではあまりお笑いの文化は浸透していない印象です。以前、タイ人とカラオケに行った際、有名な日本人は誰かと聞いたら、「ピコ太郎」が出てきて、ピコ太郎の知名度は非常に高かったことを思い出します。
またお笑いではありませんが、タイといえば微笑みの国です。どうやらタイの微笑みには13種類があるようでして、以下に分類されるようです。①イム・タック・ターイ(あまり知らない人への丁寧な微笑み)②イム・サオ(悲しみを表す微笑み)③イム・ヘン(例:あなたから借金しているのはわかっているが、返すお金はないよ的な微笑み)④イム・ミー・レッサナイ(心の中にある悪意を隠す微笑み)⑤イム・イム・イェー(事の善悪は分かっている。でも覆水盆にかえらざる微笑み)⑥ファン・イム(冗談が面白くなくても笑わなければいけない的な微笑み)⑦イム・ヨー(だから言ったでしょ。的な微笑み)⑧イム・スー(勝ち目のない闘いに直面した時の微笑み)⑨イム・タック・ターン(どうぞ提案してください。でもあなたの考えは良くない的な微笑み)⑩イム・ターン・ナムター(とつても幸せで泣いているんだよ的な微笑み)⑪イム・マイオーク(笑おうとするけど強張っちゃう敵な微笑み)⑫イム・チューン・チョム(あなたは素晴らしいといった類の微笑み)⑬イム・チュア・チュアン(私の勝ちだ。的な微笑み)。13個書き出してみました。タイで生活し始めて1年になるものの、タイ人の微笑みは未だ区別できておりません。知らないうちにタイ人の怒りをかわさないよう、私自身も13の微笑みを使い分けるエキスパートになりたいものです。

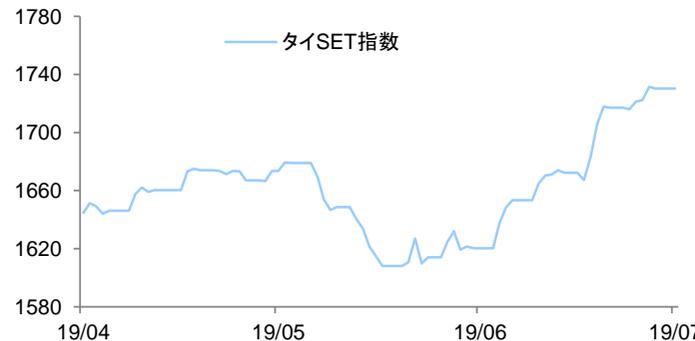
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/4	消費者物価指数(前年比)	5月	0.99%	1.15%	1.23%
6/4	CPIコア(前年比)	5月	0.56%	0.54%	0.61%
6/4	消費者景気信頼感指数	5月	-	64.8	66.2
6/21	輸出(通関ベース)	5月	-5.00%	-5.79%	-2.57%
6/21	輸入(通関ベース)	5月	-2.00%	-0.64%	-0.72%
6/21	貿易収支	5月	\$628M	\$182M	-\$1457M
6/26	タイ中銀政策決定会合	6月	1.75%	1.75%	1.75%

マレーシアリング相場

予想レンジ:	USD/MYR	4.1000	~	4.1800
	MYR/JPY	25.57	~	26.25
	JPY/MYR	3.8100	~	3.9100

マレーシアみずほ銀行 関上 伸一

■ 先月の為替相場

6月のUSD/MYRは米雇用統計・FOMCを契機とするUSD安の流れに沿い、前月末につけた年初来安値(4.2000)から下落する展開となった。

「中国が米向けレアアース輸出制限検討」報道と米のメキシコ向け5%輸入関税から5月末に昨年11月以来となる4.2000の年初来高値を更新していたUSD/MYRは、月初から米利下げ期待が高まる中で反落。7日の米5月非農業部門雇用者数は+75千人と予想(+175千人)を大幅に下回り、加えて過去2ヶ月分の発表値もリバイスダウン。発表前には先物市場で50%程度織り込まれていた7月利下げ確率が86%程度に急上昇したことを受け、USD/MYRは4.15台へと下落した。

中旬には、米トランプ大統領が通商摩擦に関して中国習国家主席の大阪G20への出席を求める発言や不法移民に掛かるメキシコへの牽制発言が警戒感を高める中、米原油在庫の積みあがりに起因する北海ブレントの一時的な60ドル割れとペルシャ湾タンカー砲撃事件もMYRの圧迫材料となり、一旦USD/MYRは18日に4.1840の戻り高値を付ける。

19日発表の米FOMC結果は、F.F.レート誘導目標自体は据置きながら、ドットチャートは17人の政策委員中8名が2019年末迄の利下げを示唆。剩え、うち7名は年内0.50%の切下げを予想。前回声明に盛り込まれていた将来の政策金利調整に関する“patient(我慢強い)”という言い回しは取り除かれ、金利先物は7月利下げを完全に織込んだ。FRBのハト派スタンスが明らかになると20日にUSD/MYRは4.15を割り込む展開となり、加えて大阪G20サミットでのトランプ・習会談開催の報道も追加関税発動回避シナリオへの期待感を幾分高めた格好で、21日にUSD/MYRは5月6日以来の安値となる4.1450迄下落。

下旬は米国・イランの地政学リスクの高まりを受け、北海ブレントも65ドル近辺まで反発する中、USD/MYRは25日に4.1380迄下値を更新。ハト派のセントルイス連銀ブロード総裁が7月の0.50%利下げを否定するとUSDが反発する中、27日時点で4.1500レベルで推移している。

■ 今月の見通し

7月のUSD/MYRは4.10—4.18レンジでの推移を予想。米金融政策のハト派化がUSDの上値を抑える一方、米中貿易摩擦の不確実性とマレーシア証券市場からの海外投資家のアウトフロー懸念がMYRの圧迫材料となる可能性がある。

4月中旬のFTSEラッセル世界国債インデックスからのマレーシア国債除外懸念と5月の米中通商協議の決裂を背景にこの2ヶ月間続いていたUSD/MYRの上昇センチメントも、米国利下げ期待の高まりを受けたUSD安から6月には一服した格好となった。チャートでも5月末の高値(4.2000)は結局昨年11月の高値(4.2025)を更新できず、ダブルトップを形作っている。今月末のFOMCに向け、利下げ期待が世界株式市場を支える展開となれば、リスクオンとUSDの水準調整継続から、基本シナリオとしてはMYR買い地合となる可能性が高い。

しかしながらマレーシア債券市場の海外投資家の資本フローは、4月のMYR▲10blnからは縮小したものの、5月もMYR▲4blnと2ヶ月連続のネット流出。6月に入ってからはUSD金利低下とUSD安期待感から株式市場と同様に流入に転じている模様で、10年国債利回りも低下基調ながら、インデックス問題への海外勢の警戒感は解けていない。また大阪G20後の米中協議成立への市場の期待感も既に小さいが、25%追加関税発動となれば一次産品・中間財を中心に最大輸出相手国である中国の経済環境へのインパクトは無視できない。俄かに高まった米・イラン間の地政学リスクは原油高を伴い得るものの、MYRにとってはネガティブな材料と言えよう。

なお、先月の当欄でも触れた海外企業からのFDI状況は、5月に投資開発庁から発表されたQ1の実額がMYR21.7blnと四半期ベースでの過去最大額を記録。6月上旬に公表されたQ1の投資認可額も前年同期比+73%のMYR29.3blnと堅調さを維持し、特に国別では米国の認可額が目立っている状況。果たして、5月の米中摩擦の情勢悪化が奇貨となって、海外からの投資がスローダウン気味の国内投資を補う形となるか、大阪G20サミットでの米中首脳会談の帰趨が注目される。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

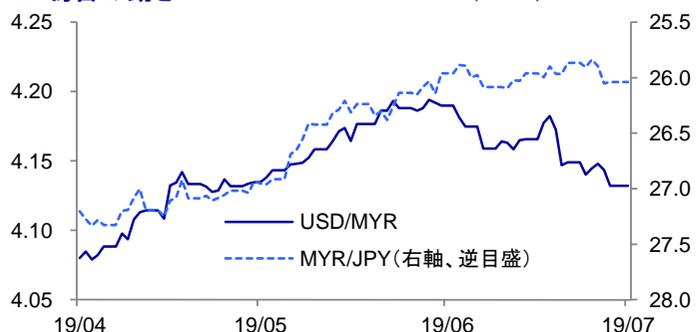
『当地のお笑い事情』
当地マレーシアのお笑いは「スタンドアップ・コメディ」と呼ばれるが、イメージは日本の漫談である。パイオニアとされるのはダグラス・リムで、海外のお笑いコンテストにも出場する等、当地斯界の第一人者だ。女性ではジョアンネ・カムが現在のリーディングスターと云えるが、そのぼつちりした体形から繰り出される芸風は、やや下ネタに傾斜している感が否めない。

日本の漫才が歴史的に二人組みのコンビを主体としているのに対し、当地の著名どころのコメディアンは殆どピン芸人であることが特徴的だ。ただ、業界としては厳しいのか、単独でライブを行うというよりは、何らかのイベントに招待されて、コマを割り当てて貰って芸を披露するというような露出の仕方が一般的な様である。国内銀行のトレジャリー部門が招かれる当地金融市場協会の年次総会/ディナーでも、昨年は催し物として数名の芸人が招かれていた。

一方で芸人ではないが、昨年の政権交代後に不正資金疑惑で逮捕された当地のナジブ前首相は、最近では「マルアパボスク」(マレー語で『おいらのボスは恥さらし』の意)というキャッチコピーでポスターを作成し、メディアにも多く露出。彼が放つツイートは、特に若者層から注目を集めている。一国の元宰相を「お笑い」のお題で登場させるのは大変恐れ多いのだが、いかなる形でも世の中に対して発信力を保ち続けていることには、正直感服する。

■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/3	Trade Balance (MYR)	Apr	12.50B	10.89B	14.37B
6/3	Exports	Apr	-2.1%	1.1%	-0.5%
6/3	Imports	Apr	-0.3%	4.4%	-0.1%
6/11	Industrial Output y/y	Apr	2.50%	4.00%	3.10%
6/11	Foreign Reserves	31-May	-	102.3B	102.8B
6/21	Foreign Reserves	15-Jun	-	102.6B	102.3B
6/26	CPI y/y	May	0.3%	0.2%	0.2%

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR	13900	~	14300
IDR/JPY	0.74	~	0.77
JPY/IDR	129.87	~	135.14

(注)100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 田才 雄

■ 先月の為替相場

6月のドルルピアは、14090水準から14350水準レンジ内でルピアは堅調推移となった。

ドルルピアは断食明け休暇レバラン後の6月10日に取引を再開。前月末、格付会社によりインドネシア格付がトリプルBマイナスからトリプルBに上げられたことでルピア高が進行。14200近辺からのスタートとなった。同日発表された、インドネシア5月消費者物価指数は前年比+3.32%と1年振りの上昇となるも、ラマダン(断食月)の食料品高騰が背景で、且つ中銀目標のレンジ内でありルピアは堅調推移を維持。

米中貿易戦争に対する懸念が煽る中、14日にオマーン湾でのタンカー攻撃を受けた原油高を背景にルピアは14300台まで下落。翌週17日には月高値となる14350近辺までルピア安が進行した。19日には米中通商合意への期待が再燃したことを受けて14200台までルピアは反発。翌20日にはFOMC結果を受けた米利下げ期待の更なる強まりを受けて、ルピア高が14100台まで進行した。同日のインドネシア中銀定例会合では政策金利は据え置かれるも、流動性拡大を企図した銀行準備率を0.5%引き下げ、次回以降の利下げに含みを持たせる等、ハト派な内容となったが、翌21日も海外投資家からの旺盛な資金流入が継続しルピアは堅調に推移。一時、月高値となる14100を割れを示現した。

月末週24日には5月分のインドネシア貿易収支が発表され、輸出入ともに大きく減少する冴えない内容となったが、小幅ながら黒字を記録。為替相場への影響は限定的だった。中東情勢悪化を受けた原油価格の反発等、ルピアには悪材料がある中でも、ルピアの底堅い推移が継続、14100台を維持している。(6月27日現在、終値ベース)

■ 今月の見通し

7月のドルルピアは、ルピアの底堅い推移を予想する。

ルピアを取り巻く国内環境については、基本的な認識はこれまでと不変。4月分のインドネシア貿易収支が改定値となり、過去最大の赤字ではなくなったものの、巨額の貿易赤字であることに間違いはない。5月分の貿易収支は小幅な黒字とはなったものの、振るわない輸出を輸入減少分で補ったに過ぎず、今後も冴えない貿易収支がルピアには重く押し掛かる。大きなマイナス計上が続く所得収支を貿易収支がファイナンスするには程遠い状況であり、慢性的な経常赤字が今後も継続するであろうことに鑑みれば、長期的にルピアが上昇していくシナリオは描き難い。

だが、足許、外部環境は大きく変化している。7月末にも米政策金利利下げが確実視される状況下、新興国に対する資金流入が今暫く続く可能性が高く、ルピアには追い風となる。加えて、5月末のインドネシア格付引上げというサプライズもルピアをサポートしている。

斯かる状況下、インドネシア中銀ワルジヨ総裁も先月の政策決定会合後、利下げについて「時期と規模の問題」と述べる等、当国でも利下げがコンセンサスとなりつつあるが、ルピアは安定した推移を保っている。

また、懸念が膨らむ中東情勢を受け、原油価格が反発しており原油輸入国通貨にはネガティブ。原油相場がインドネシアルピアの上昇を阻む要因となることも想定されるが、6月の原油反発局面でも、ルピアは底堅く推移しており、中東情勢が急激に悪化しない限りは、米利下げ期待にルピアは支えらう。

ルピアにとってポジティブな材料ばかりとは言えないものの、米利下げ期待の影響は大きく、7月のルピアは引き続き底堅く推移しそうだ。

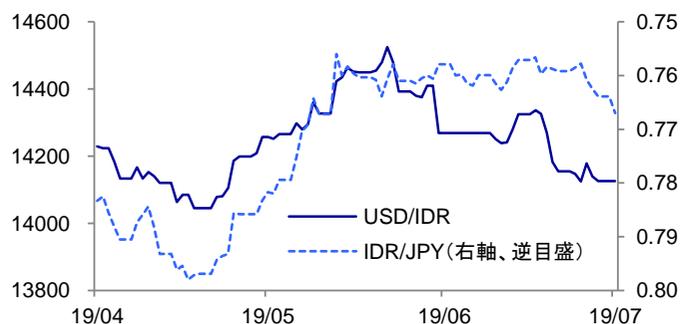
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のお笑い事情』
今大分変わりましたが、昔人気の高いお笑い芸人は3人以上のグループが主でした。強く記憶に残ったのは3人組のWarkop DKI(元々は5人)とSrimulat(メンバーの入れ替わりがよくあり、正確な人数は不明)です。両者は1970年代から活動し、80~90年代で一番人気が高く、何度か映画を主演したほどです。前者は3人のメンバーのうち2人が亡くなっており、活動を続けられないが、後者の方がメンバーの入れ替わりがあるものの、グループとして今でも活動を続けています。最近になると、単独で活動しているお笑い芸人が増えており、アメリカのようなスタンドアップ・コメディスタイルが主流になってきます。日本漫才のボケと突っ込みと違い、どちらかというとストーリーを話してオチで笑わせるといったスタイルです。

2011年から毎年Stand-Up Comedy Indonesia(SUCI)という日本のM-1グランプリのような漫才コンテストが開催されました。同コンテストを最初に提案した一人はインドネシアのお笑い界に新しい風を巻き起こしたRaditya Dika(ラディティヤ・ディカ)氏という作家・コメディアンでした。彼は6つもベストセラーコメディ小説を執筆し、自分の小説の映画化で脚本家・監督・主人公として主演しました。(インドネシアみずほ銀行 資金為替課 アストリド)

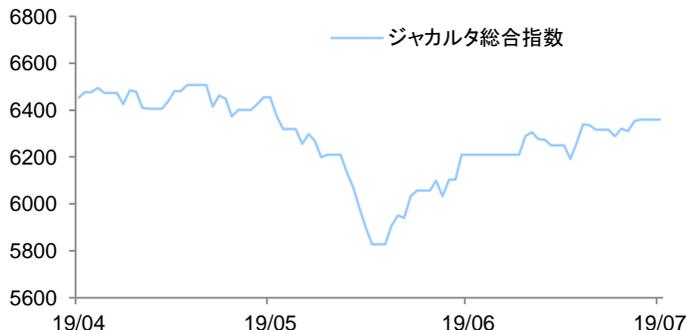
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表E	イベント	期間	予想	結果	前回
6/10	CPI(前年同月比)	5月	3.13%	3.32%	2.83%
6/13	外貨準備高(USD B)	5月	-	120.4	124.3
6/20	BI 7daysリバースレポ金利		6.00%	6.00%	6.00%
6/24	貿易収支(USD M)	5月	-1,329	208	-2,287
6/24	輸出(前年比)	5月	-14.50%	-8.99%	-9.54%

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 50.50 ~ 52.50
 PHP/JPY 2.08 ~ 2.11

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 樋上 陽一

■ 先月の為替相場

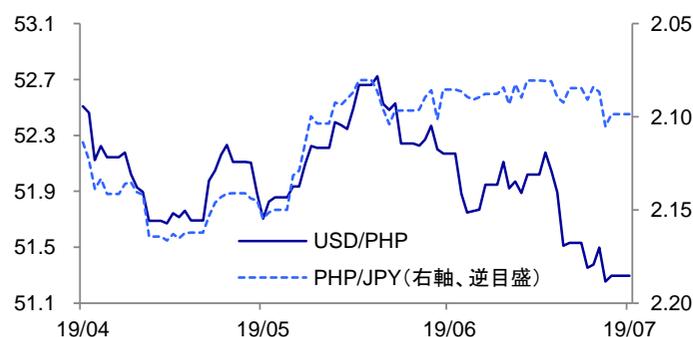
月初のドルペソ為替相場は、5月末終値(1米ドル=52.16ペソ)対比同水準の1米ドル=52.15ペソで取引開始。
 5月30日にトランプ米大統領がメキシコへの追加関税を表明したことでリスクオフになると思われたが、グローバルな為替市場が米金利低下を材料視してドル売り地合になるとアジア通貨もこの流れで緩やかに上昇。
 ドルペソ為替相場も節目の1米ドル=52ペソを割り込んだ。
 その後、米当局者からのハト派発言、更には米5月ADP雇用統計が市場予想を大きく下回ったことでアジア通貨は対ドルで強含むことに。6日のドルペソ為替相場は1米ドル=51.74ペソで取引終了となり、終値ベースで4月15日以来のペソ高水準となった。
 一方、ペソ買いの勢いも限定的で米5月雇用統計を前にドル買い戻しが優勢となり、7日の終値は1米ドル=52ペソ台(52.04ペソ)を回復。米雇用統計明け10日のドルペソ為替相場は1米ドル=52.05ペソで取引開始。中国の5月貿易統計が冴えなかったことでアジア通貨は対ドルで軟調になる一方、米ドルの金利先高観が強く意識され、メキシコへの関税賦課が回避されたことでリスクオフムードが和らいだことに加え、比4月貿易収支が31.4億ドルの赤字となり、赤字幅が市場予想(39.2億ドルの赤字)より小さかったことが好感され、ドル売りペソ買いがフローも見られた。結局、月中は1米ドル=52ペソ丁度を挟んで揉み合いに。
 FOMC後に米ドル金利の年内利下げの可能性が示唆されるとドルペソ為替相場は1米ドル=51.40-50ペソレベルへ下落。
 さらにはG20サミット首脳会議での米中首脳会談への期待から市場センチメントが改善すると、28日には昨年2月以来のペソ高水準である1米ドル=51.17ペソで取引される場面もみられた。G20を前にしてこの一ヶ月のペソ高に対する調整も入りそうだが、ドルの上値は重い。6月28日11時現在1米ドル=51.20ペソ台での取引。

■ 今月の見通し

6月に発表された比4月OFW(海外在留フィリピン人労働者)送金は24.4億ドルで前月の25.1億、市場予想の24.6億に届かなかった。中東の地政学リスクが高まるとOFW送金の伸びは今後期待できそうにない。一方、貿易収支についていえば左記のとおり、比4月貿易収支が31.4億ドルの赤字となり、赤字幅が市場予想(39.2億ドルの赤字)より小さかったことが好感された。しかしながら今後は今年度の国家予算が承認されたことで輸入の増加が見込まれる一方、輸出については、半導体、電子部品については半導体サイクルから予想される需要や米中貿易摩擦で拡大が見込めそうにない。経常フローからは引き続きペソ安を示唆している。
 足元、外国人投資家のフィリピン株売買動向は拮抗しているものの、昨年末から続いてきた買いの勢いはみられない。よって世界景気の不透明感、地政学リスクも含めて相場予想におけるペソ安スタンスに変更はない。
 ペソ高材料としてはインフレリスクの後退が挙げられよう。フィリピン中銀は6月20日に政策金利を4.50%に据え置くことを決定。ジョクノ総裁は「インフレは管理可能で、国内経済は堅調な成長が見込まれており、当面、金融政策を維持できる」と述べている。管理可能とはインフレが中銀のインフレターゲットである2~4%に収まることで、中銀はインフレ見通しを引き下げ2019年を2.7%(前回2.9%)、2020年を3%(同3.1%)に。
 とはいえ、今後の金融政策は緩和的とみるべきであろう。政策金利を据え置きながら預金準備の引き下げも視野に入る。金融緩和はペソ安を誘引する可能性あり。
 ほかに注目すべきは、先月のフィリピン中銀ジョクノ総裁のコメント。記者が現在のドルペソ為替相場(当時1米ドル=52ペソ前半)についてコメントを求めたとき『潤沢なドルを保有している』と回答。過度なペソ安防衛に断固とした対応が取られそう。また、中銀は想定ドルペソ為替相手を今年1米ドル=52ペソ丁度、来年は51.50ペソとしている。現行水準からはややペソ高である。(28日11時現在)

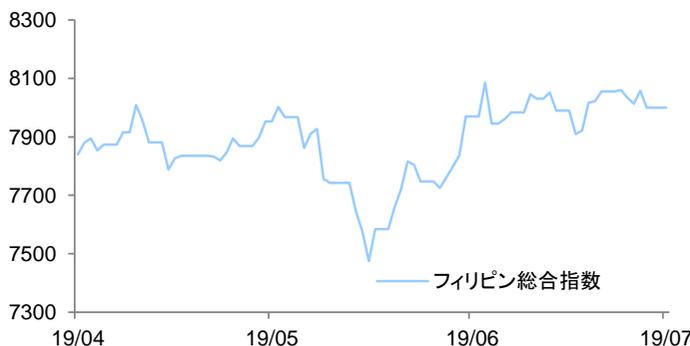
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
 上記参照

(資料)ブルームバーグ

期間 予想 結果 前回

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 67.50 ~ 72.50
INR/JPY 1.49 ~ 1.57

アジア・オセアニア資金部 インド室 田川 順也

■ 先月の為替相場

【6月の米ドル/インドルピーは方向感の出ない展開だった】

69.60で月初取引を開始。前月末に発表された印第1四半期GDPが弱い結果になったことから金融緩和観測が強まり債券市場では買い先行、金利は低下する一方で、インド株式市場はこれを好感し、センセックスは史上最高値を更新。為替市場では低下する金利よりも高値追いつける株式を見に行く展開にルピーは買われる展開。ドル/ルピーは4日につけた69.02が当月安値となる。ただし、その後はインド中銀の政策会合を控えて一段の下値追いはならず、迎えた中銀会合では政策金利の低下が決定された(6.00%→5.75%)ものの、事前織り込み済みであったことから為替レートには大きなインパクトはなく、20-30パイサの動きにとどまった。その後は原油価格が強含む場面でルピー安に傾き、ドル/ルピーは69台後半まで上昇。人民元が対ドルで下落を取り戻す動きがルピーの支援材料になる場面もあったが、弱いコアCPIや株安に押されドル/ルピーはじりじりと上昇。17日には当月高値となる69.73をつける。

終盤にかけては米FOMCの声明文が弱気な内容となると、利下げ観測の高まりからドル売り呼び、アジア通貨は全般的に堅調となる。27日執筆時点で69.20-30レベルで取引されている。

【6月のインドルピー/日本円は次第に水準を切り下げる展開だった】

1.557レベルで当月オープン。一週目は材料難から動きづらく、ルピー/円は概ね1.56-1.565の狭いレンジでの取引となった。ただ、7日に発表された米雇用統計が失望を誘う内容となるとリスク回避の円買いが先行、ドル/円が108円台を割り込むとルピー/円も1.55レベルまで下落。ただし、その週末に米-メキシコ間の通商交渉に進展が見られると週明けのマーケットではドル/円が108円台半ばまで戻りを見せ、ルピー/円も水準を戻す。

その後ドル/円は108.20-40程度の膠着となるが、上述のようにドル/ルピーの上昇につれルピー/円も弱含む展開。FOMCを受けてドル/円が明確に107円を割り込む流れにルピー/円も急速に円高が進行し、当月安値となる1.5350レベルまで下落。その後、月末に開催されるG20でのトランプ大統領と中国の習近平国家主席との首脳会談開催のニュースでドル円は再び108円台を回復。27日執筆時点でルピー/円は月初水準の1.5550-1.5600レベルで取引されている。

■ 今月の見通し

【7月の米ドル/インドルピーは方向感を欠く展開を予想】

5月23日に総選挙開票を乗り越え、5月31日に予想を下回る印GDPの発表、6月6日に印中銀の利下げ発表、とイベントが続いた。(選挙については先月分本欄ご参照)1-3月期GDPは事前予想比弱い内容となった。昨年11月以降ルピー安が反転する中で、輸出が伸び悩んだ点、および設備投資が大幅な減少を見せた点が減速の背景となっている。地方選を受けて総選挙でのBJP再選について楽観する動きが引き締まったことを勘案すれば、選挙結果が出るまで投資を控える動きが出たというのはタイミング的にも合点がいくところ。弱いGDPを受けて中銀政策会合を前に利下げ予想が一段と高まっていたことから、利下げが為替市場に与えた影響は限られた。

ただし、中銀は同会合にて政策スタンスを「緩和的」とのワードに変更(従来までは「中立」)し、今年に入り3回既に利下げを決定しているにも関わらず、一段の利下げを匂わせる内容となった。これに呼応して国債利回りは急低下を見せており、一般的にはルピー売りの材料となるが、株式市場は金融緩和を好感し高値圏でのラリーとなった。債券価格・株価は上昇していることから対内証券投資の増加が見込まれ、ルピー買いを想起させることから支援材料となる場面も見られた。

次の国内注目イベントは7月5日の予算発表。農家支援やインフラ投資などの景気刺激策がどうなるかに焦点が当たっている。単純に刺激策を待ち望む声も聞かれるが、財政収支赤字の悪化は特に外国人投資家にとってルピー売りの材料となりえる点には注意。景気策(=歳出増)と財政収支赤字縮小のバランス力が試される。

対外要因では米中の通商交渉に加え、米中央銀行は利下げに転じる動きを見せている。これに伴って昨年11月に3.2%を上回っていた米10年国債利回りは2016年以来の2%を割り込む動きを見せている。かかる中、ドルが買いつらいというのは正直な投資家心理だろう。ここから波及する円高もさることながら、米金利が低下する局面では高金利通貨への投資資金のシフトも視野に入る(もちろん米中通商交渉と人民元の動向も見ながらではあるが)。併せて、イランが米偵察機を撃墜等、中東情勢を受けた原油価格の動向も気になるところ。インドの金利低下がルピー安材料となりえるが、同時に米金利も低下しておりドル安に傾倒しやすい地合いである点、インドへの投資インフローが予想される点、これらを勘案するとドル/ルピーはどちらにも振れる可能性があり方向感の出づらいつ展開を想定したい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のお笑い事情』

「好きなコメディは？」と聞いて、当支店の同僚達からの返事は全て映画のタイトル。年間2000本近くの映画が公開される世界一の映画大国ならではのですね。下記は同僚達のおすすめコメディ映画ランキングです。

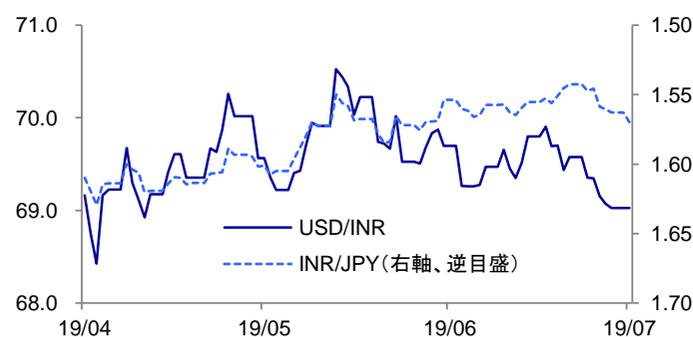
- 1位 3 Idiots ~きつと、うまくいく~ ※
 - 2位 Munna Bhai M.B.B.S.
 - 3位 Andaz Apna Apna
 - 4位 PK ※
 - 5位 Hera Pheri
 - 6位 Golmaal
 - 7位 Lage Raho Munna Bhai
 - 8位 Welcome
 - 9位 Hungama
 - 10位 Chup Chup Ke
- (※:日本語吹替版あり、その他は英語字幕版あり)

1位の「3Idiots ~きつと、うまくいく~」は全世界興行収入が約100億円。ベテラン俳優のアミール・カーン主演、インド屈指の難関工科大学を舞台にした心温まる青春映画なのだとか。同僚達からも「絶対に観て!」と強く言われた作品。

4位の「PK」は全世界興行収入が150億円超えの大ヒット作で、「3Idiots」と同じ監督・主演の作品。当地インドではタブーかと思われる「宗教」をテーマにした作品で、涙あり、笑いありの心温まる映画だそうです。私もいつか観てみようと思います。(ニューデリー支店 市野瑞穂)

■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

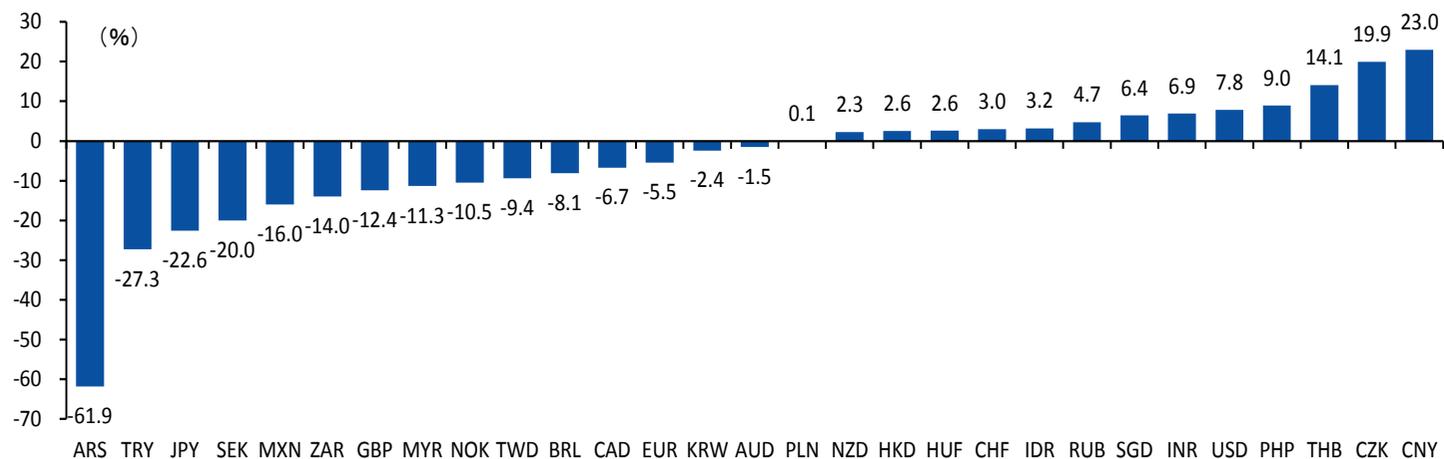
発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
-----	------	----	----	----	----

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2018年末	2019年6月末	騰落率	株式市場	2018年末	2019年6月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	23327.46	26599.96	14.0%	-
日本	USD/JPY	109.69	107.85	-1.7%	日経平均株価	20014.77	21275.92	6.3%	8.1%
ユーロ圏	EUR/USD	1.1467	1.1373	-0.8%	ドイツDAX指数	10558.96	12398.8	17.4%	17.4%
英国	GBP/USD	1.2754	1.2696	-0.5%	ロンドンFTSE100指数	6728.13	7425.63	10.4%	10.9%
豪州	AUD/USD	0.7049	0.702	-0.4%	S&P/ASX200指数	5646.4	6618.772	17.2%	17.7%
カナダ	USD/CAD	1.3637	1.3095	-4.0%	S&Pトント総合指数	14322.86	16382.2	14.4%	19.1%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.8785	6.8668	-0.2%	上海総合	2493.896	2978.878	19.4%	19.7%
香港	USD/HKD	7.8319	7.8107	-0.3%	香港ハンセン	25845.7	28542.62	10.4%	10.7%
インド	USD/INR	69.7675	69.0275	-1.1%	インドSENSEX30種	36068.33	39394.64	9.2%	10.4%
インドネシア	USD/IDR	14390	14126	-1.8%	ジャカルタ総合	6194.498	6358.629	2.6%	4.6%
韓国	USD/KRW	1110.95	1154.8	3.9%	韓国総合株価	2041.04	2130.62	4.4%	0.4%
マレーシア	USD/MYR	4.1335	4.132	0.0%	ブルサマレーシアKLCI	1690.58	1672.13	-1.1%	-1.1%
フィリピン	USD/PHP	52.556	51.296	-2.4%	フィリピン総合	7466.02	7999.71	7.1%	9.8%
シンガポール	USD/SGD	1.3629	1.353	-0.7%	シンガポールST	3068.76	3321.61	8.2%	9.0%
台湾	USD/TWD	30.549	30.989	1.4%	台湾加権	9727.41	10730.83	10.3%	8.7%
タイ	USD/THB	32.327	30.68	-5.1%	タイSET	1563.88	1730.34	10.6%	16.6%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2019年5月時点)



■ 実質GDP成長率

	2017Q3	2017Q4	2018Q1	2018Q2	2018Q3	2018Q4	2019Q1	2017	2018
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	2.8	2.3	2.2	4.2	3.4	2.2	3.1	2.2	2.9
日本*	2.4	1.3	-0.4	2.3	-2.6	1.8	2.2	1.9	0.8
ユーロ圏	2.8	2.8	2.5	2.2	1.7	1.2	1.2	2.4	1.9
英国	2.0	1.6	1.2	1.4	1.6	1.4	1.8	1.8	1.4
豪州	2.9	2.4	3.1	3.1	2.8	2.4	1.8	2.4	2.9
カナダ*	1.3	1.7	1.5	2.5	2.1	0.3	0.4	3.0	1.9
エマージングアジア									
中国	6.7	6.7	6.8	6.7	6.5	6.4	6.4	6.8	6.6
香港	3.6	3.5	4.6	3.6	2.8	1.2	0.6	3.8	3.0
インド	6.8	7.7	8.1	8.0	7.0	6.6	5.8	8.2	7.2
インドネシア	5.1	5.2	5.1	5.3	5.2	5.2	5.1	5.1	5.2
韓国	3.9	2.8	2.8	2.9	2.1	2.9	1.7	3.2	2.7
マレーシア	6.1	5.7	5.3	4.5	4.4	4.7	4.5	5.7	4.7
フィリピン	7.2	6.6	6.5	6.2	6.0	6.3	5.6	6.7	6.2
シンガポール	4.6	3.6	4.6	4.2	2.6	1.3	1.2	3.7	3.2
台湾	3.4	3.5	3.2	3.3	2.4	1.8	1.7	3.1	2.6
タイ	4.5	4.0	5.0	4.7	3.2	3.6	2.8	4.0	4.1

(注) インドの年間成長率は会計年度(4~3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	18/10	18/11	18/12	19/01	19/02	19/03	19/04	19/05	2017	2018
	(%)								(%)	
先進国										
米国	3.8	3.7	3.9	4.0	3.8	3.8	3.6	3.6	4.4	3.9
日本	2.4	2.5	2.4	2.5	2.3	2.5	2.4	2.4	2.8	2.4
ユーロ圏	8.0	7.9	7.9	7.8	7.8	7.7	7.6		9.1	8.2
英国	4.1	4.0	4.0	3.9	3.9	3.8	3.8		4.4	4.1
豪州	5.0	5.1	5.0	5.0	4.9	5.1	5.2	5.2	5.6	5.3
カナダ	5.7	5.6	5.6	5.8	5.8	5.8	5.7	5.4	6.3	5.8
エマージングアジア										
中国			3.8			3.7			3.9	3.8
香港	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	3.2	2.8
インドネシア									5.4	5.2
韓国	3.9	3.8	3.8	4.4	3.7	3.8	4.1	4.0	3.7	3.8
マレーシア	3.3	3.3	3.3	3.3	3.3	3.4	3.4	0.0	3.4	3.3
フィリピン	5.1			5.2					5.7	5.3
シンガポール			2.2			2.2			2.2	2.1
台湾	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.8	3.8	3.7
タイ	1.0	1.0	0.9	1.0	0.8	0.9	1.0	1.1	1.2	1.1

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	18/11	18/12	19/01	19/02	19/03	19/04	19/05	19/06	2017	2018
	(前年比%)								(前年比%)	
先進国										
米国	2.2	1.9	1.6	1.5	1.9	2.0	1.8		2.1	2.4
日本	0.8	0.3	0.2	0.2	0.5	0.9	0.7		0.5	1.0
ユーロ圏	1.9	1.5	1.4	1.5	1.4	1.7	1.2	1.2	1.5	1.8
英国	2.3	2.1	1.8	1.9	1.9	2.1	2.0		2.7	2.5
豪州		1.8			1.3				1.9	1.9
カナダ	1.7	2.0	1.4	1.5	1.9	2.0	2.4		1.6	2.3
エマージングアジア										
中国	2.2	1.9	1.7	1.5	2.3	2.5	2.7		1.6	2.1
香港	2.6	2.5	2.4	2.1	2.1	2.9	2.8		1.5	2.4
インド	2.3	2.1	2.0	2.6	2.9	3.0	3.1		3.3	4.0
インドネシア	3.2	3.1	2.8	2.6	2.5	2.8	3.3		3.8	3.2
韓国	2.0	1.3	0.8	0.5	0.4	0.6	0.7		1.9	1.3
マレーシア	0.2	0.2	-0.7	-0.4	0.2	0.2	0.2		3.9	1.0
フィリピン	6.0	5.1	4.4	3.8	3.3	3.0	3.2		3.2	5.1
シンガポール	0.3	0.5	0.4	0.5	0.6	0.8	0.9		0.6	0.4
台湾	0.3	-0.1	0.2	0.2	0.6	0.7	0.9		0.6	1.4
タイ	0.9	0.4	0.3	0.7	1.2	1.2	1.2		0.7	1.1

(注) 豪州は四半期データ。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2017Q3	2017Q4	2018Q1	2018Q2	2018Q3	2018Q4	2018Q1	2017	2018
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-2.3	-2.3	-2.3	-2.2	-2.2	-2.4	-2.4	-2.3	-2.4
日本	4.2	4.2	4.1	4.1	3.8	3.5	3.5	4.2	3.5
ユーロ圏	3.1	3.2	3.3	3.4	3.1	2.9	2.8	3.2	2.9
英国	-3.6	-3.3	-3.4	-3.2	-3.5	-3.9	-4.4	-3.3	-3.9
豪州	-2.8	-3.4	-2.2	-2.5	-2.1	-1.3	-0.6	-2.6	-2.0
カナダ	-2.6	-2.8	-2.9	-3.0	-2.6	-2.6	-2.7	-2.8	-2.6
エマージングアジア									
中国	1.2	1.6	1.1	0.7	0.5	0.4	1.0	1.6	0.4
香港	4.8	4.7	4.5	4.1	3.7	4.3	4.9	4.7	4.3
インド	-1.4	-1.5	-1.8	-1.9	-2.3	-2.5	-2.1	-1.5	-2.5
インドネシア	-1.3	-1.6	-1.9	-2.3	-2.8	-3.1	-3.1	-1.6	-3.0
韓国	5.0	4.6	4.3	4.4	4.4	4.5	4.5	4.6	4.5
マレーシア	3.0	3.0	3.7	3.2	2.6	2.3	2.4	3.0	2.3
フィリピン	-0.1	-0.8	-0.6	-1.7	-2.7	-2.4	-2.6	-0.8	-2.4
シンガポール	17.0	16.4	16.4	17.2	17.7	17.9	17.7	16.4	17.9
台湾	13.4	14.4	14.6	14.5	13.3	12.2	11.4	14.4	12.2
タイ	9.7	9.7	9.4	9.1	7.2	6.4	5.9	9.7	6.4

(注) インドの年間経常収支は会計年度(4~3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	(単位: bp)	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	2.25-2.50	引き締め: 2015/12/17	0.25 - 0.50	2018/12/19	+25	2019/6/19	現状維持
日本	無担保コール翌日物金利	0.10	緩和: 2008/10/30	0.50	2010/10/5	0-10	2019/6/20	現状維持
ユーロ圏	主要リファイナンスオペ金利	0.00	緩和: 2011/11/3	1.50	2016/3/10	-5	2019/6/6	現状維持
英国	バンク・レート	0.75	引き締め: 2017/11/2	0.25	2018/8/2	+25	2019/6/20	現状維持
豪州	キャッシュ・レート	1.25	緩和: 2011/11/1	4.75	2015/8/2	-25	2019/6/4	-25bp
カナダ	翌日物金利	1.75	引き締め: 2017/7/12	0.50	2018/10/24	+25	2019/5/29	現状維持
エマージングアジア								
中国	1年物貸出基準金利	4.35	緩和: 2012/6/8	6.31	2015/8/25	-25	2015/10/23	-25bp
インド	翌日物レポ金利	5.75	緩和: 2019/2/7	6.50	2019/4/2	-25	2019/6/6	-25bp
インドネシア	7日物リバースレポレート	6.00	引き締め: 2018/5/17	4.25	2018/11/15	+25	2019/6/20	現状維持
韓国	7日物レポ金利	1.75	引き締め: 2017/11/30	1.25	2018/11/30	+25	2019/5/31	現状維持
マレーシア	翌日物金利	3.00	緩和: 2019/5/7	3.25	2019/5/7	-25	2019/5/7	-25bp
フィリピン	翌日物金利	4.50	緩和: 2019/5/9	4.75	2019/5/9	-25	2019/6/20	現状維持
タイ	翌日物レポ金利	1.75	引き締め: 2018/12/19	1.50	2018/12/19	+25	2019/6/26	現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	6.25	緩和: 2012/3/12	15.00	2017/7/7	-25	2017/7/7	-25bp

(注)インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をBIレートから7日物リバースレポレートに変更

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行